ひげ会報

17 Vol.

『故郷のアート』特集

Special Interview

原点回帰

先生コラム ～学生時代に私を変えた作品～

Designer's Note

表紙担当：谷田貝昴生

今回の表紙は「洛中洛外図」を取り入れ、これまで影響や衝撃を受けた芸術作品の記憶や体験を思い返し、芸術に興味を持つきっかけとなった原点をたどるイメージで描いてみました。
「洛中洛外図」は京都の街並みや人々の生活を鳥瞰的に表現した作品です。見下ろすように街を眺める構図、金雲の流れに沿って軽やかに移動する視線の感覚が、頭の中にある記憶、体験を遡りながら、旅をするように原点をたどる行為と繋がるのではと思いました。

この絵や冊子を通して、皆さんがそれぞれの原点を思い出すきっかけになってくれるといいかなと思います。

裏表紙担当：東出梨乃

今回は「全く新しい花鳥画」をテーマに裏表紙のデザインをしました。
企画会議でいただいた「表紙から裏表紙にかけて、過去から未来に繋がっていく」という意見を参考に、花と鳥を同じ画面に描く古典的かつスタンダードなスタイルは踏襲しながらも、現在人気急上昇中のシマエナガを描くことで、今までにない新しい作品を生み出そうとしました。今年のテーマである「原点回帰」を軸にしながらも、自分の個性が発揮された作品になるよう努めました。
　一番力を入れたのは、表紙と対になる様にカラフルな色使いをしながらも画面全体にまとまりを出すことです。私の中で絵を描くうえで1番の難所が色決めであったので、素敵な作品になるように何回も下絵を描いて構想を練りました。今回は様々なパステルカラーや淡い色でまとめることで、丸くてふわふわしたシマエナガの可愛らしさとマッチするように心がけました。裏表紙を見た人がほっこりするような、可愛らしい作品になっていたらとても嬉しいです。

『ひげ会報』とは？

学科内の有志メンバーが発行しているフリーペーパーのようなものです。
芸術を愛する比芸生が関心のあるもの、芸術にまつわるものならば何でも載せます。
大学生目線での芸術紹介や評論が、皆様にとって新たな世界への扉となりますように。

デザインの秘密

お気づきの方も多いかもしれませんが、
今号の表紙と裏表紙は繋がるようになっています！
異なる分野の芸術がどこかしらで繋がっているように
関係ないように思えても実は繋がりがあるのです。

また、本誌では、はじめから終わりにかけて、
落ち着いた色調の表紙から色鮮やかな裏表紙へと
徐々にカラフルになるようにデザインされています。

芸術が我々の人生を彩ってくれたように、
本誌も皆様に彩りをお届けできれば幸いです。

目次

04　特集！『故郷のアート』
ひげ生おすすめアートスポットMAP

10　分野別『夜のアート』

14　ChatGPTに聞く芸術

16　『有名すぎるアート』

22　先生コラム
～学生時代に私を変えた作品～

25　青学周辺のアートスポット

28　私論：AIとアート

32　比芸生に聞いてみた！

34　インタビュー　画家：山本タカトさん
～浮世絵×耽美　創作の原点を探る～

40　ひげぎゃらりぃ

44　編集後記

今号のテーマ

原点回帰

@HIGE_MAGAZINE

『ひげ会報』公式Instagram

\ひげ生おすすめ/

アートスポットMAP

福島県
【諸橋近大美術館】

福島県 郡山市
【夢を開く心の扉】

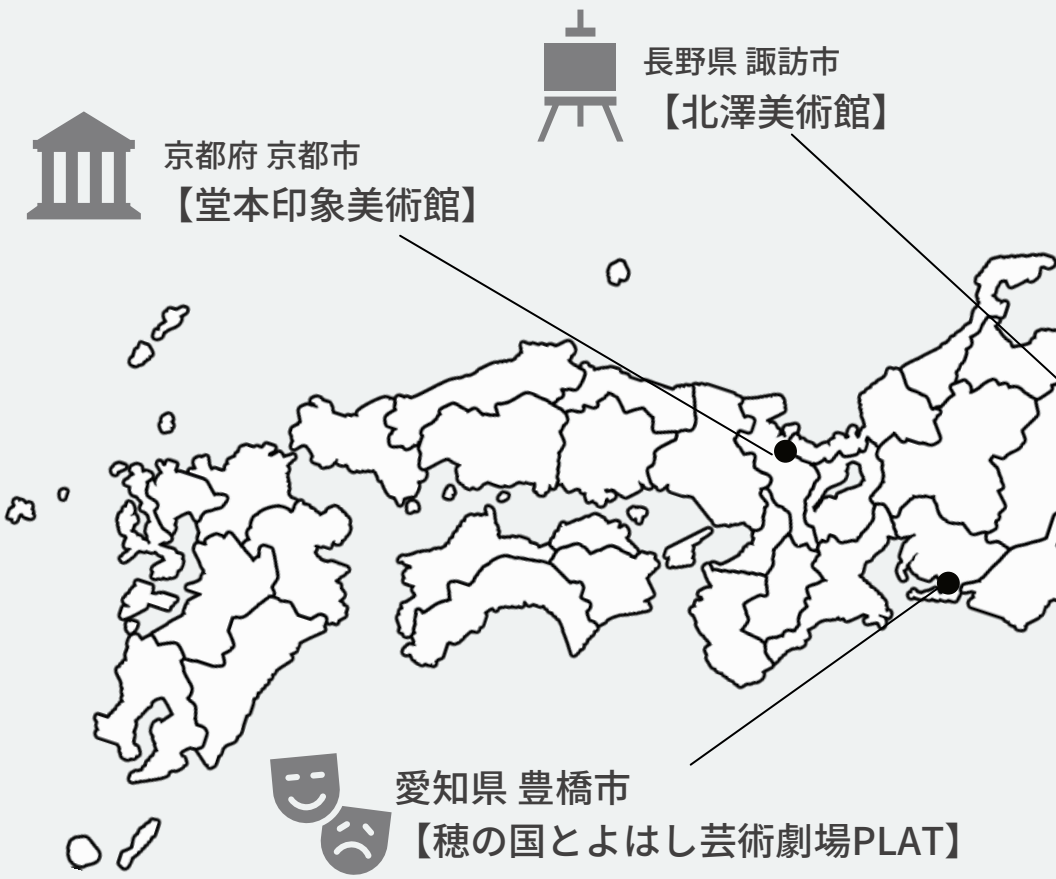
茨城県 北茨城市
【六角堂】

千葉県 千葉市
【千葉市美術館】

みなさんの故郷には
どんなアートがありますか？

特集！
故郷のアート

まずは ひげ生の原点、それぞれの“故郷”に注目。
全国各地のアートをピックアップしてご紹介します！



各地のアート

福島県
【諸橋近大美術館】

私の故郷である福島県には、会津磐梯高原という自然豊かな山の中に、諸橋近代美術館があります。主にダリやP.J.クルック、その他、ルノワール、ピカソなどの19・20世紀の巨匠の作品が所蔵されており、アジア随一のダリ所蔵美術館です。見所のひとつである建築は、中世の馬小屋をイメージして建てられたそう。美術館の前に広がる池の水面に映る諸美は磐梯山の雄大な自然も相まって、絵画のような美しい景色です。

個人的に好きなポイントは、ダリを筆頭としたシュルレアリスム作品を常時見ることができる点です。2年前に訪れた時に、P.J.クルックのシュルレアリスティックな作品に出会い、ダリと同様、その不可思議な様子に目を奪われました。福島県に来られた際に、ぜひ立ち寄ってみてほしい美術館です。

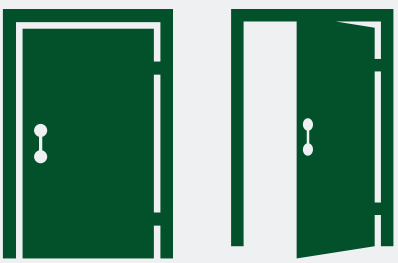
（西洋美術専攻・3年）

ACCESS

〒969-2701
福島県耶麻郡北塩原村
大字桧原字剣ヶ峯1093番23

開館時間
9:30〜17:00
(最終入館は閉館の30分前まで)

只今冬季休館中：〜2024年4月19日(金)
※2024年4月20日(土)から開館予定



ACCESS

福島県郡山市駅前２丁目４
郡山駅西口広場

郡山駅（福島県）から
徒歩　約３分

福島県 郡山市
【夢を開く心の扉】

私の地元、福島県の郡山駅前には緑の扉のモニュメントがあります。某人気アニメの「どこ◯もドア」の色違い…ではありません。GReeeeNの名曲のひとつ「扉」をもとにGReeeeNにちなんだ緑色で作られたものです。今では全国的に有名ですが、実はメンバーの4人が出会ったのは郡山でした。そのため郡山は“GReeeeN結成の地”“第二の故郷”と言われ、様々な繋がりがあります。

駅前の緑の扉は、プロジェクトの一環として2009年に作られたそうです。扉だけでなく、その足元には「歩み」という曲を連想させられるメンバーの足形、その近くには背もたれにメンバーの手形があって座ると背中を押してもらった気持ちになれるベンチなど、様々なメッセージのこもったモニュメントがあり、ファンの間では聖地のひとつとして知られています。それぞれ曲の歌詞に自分を重ね合わせながら実際に訪れることで、よりGReeeeNから勇気をもらえること間違いなしです！

（古典芸能ゼミ・4年）

千葉県 千葉市

【千葉市美術館】

千葉市美術館は「近世から近代の日本絵画と版画」「1945年以降の現代美術」「千葉市を中心とした房総ゆかりの作品」の3つを大きな柱とした美術館です。ネオ・ルネサンス様式の旧川崎銀行千葉支店を新しい建物で包み込むように設計され、建築としても優れた美術館です。さらに、開館25周年となる2020年7月に拡張リニューアルし、千葉市美術館の誇る所蔵作品を見ることが出来る常設展示室のほか、参加体験型のプロジェクトを行うアトリエ、開放感のある図書室などが増設されました。

祖母の家から徒歩で行ける距離にあり、小さい頃からよく足を運びました。以前開催されていた企画展で様々な新版画を観賞した際に非常に感銘を受け、日本美術を勉強するきっかけのひとつとなりました。

駅からも歩いて行ける距離なので、千葉に来た際にぜひ訪れてみてはいかがでしょうか？

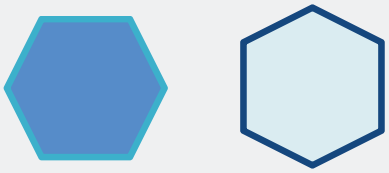
（日本美術専攻・3年）

ACCESS

〒260-0013
千葉市中央区中央3-10-8

開館時間
10:00〜18:00
（金・土　〜20：00）
(最終入館は閉館の30分前まで)

休館日
毎月第1月曜日（祝日の場合は翌日）
年末年始（12月29日〜1月3日）
他、メンテナンス日



茨城県 北茨城市

【六角堂】

茨城県北茨城市大津町五浦にある、六角形の建物。これは、近代日本美術の発展に大きく寄与した岡倉天心が思索の場所として設計したもので、現在は茨城大学五浦美術文化研究所が管理しています。晩年、天心はこの場所で静かに暮らし、釣りを楽しんだと言われています。

六角堂は東日本大震災に伴う津波で土台だけを残し流出しましたが、1年後創建当初の姿が復元されました。なお、再建された六角堂の屋根中央の「宝珠」内には、海底から見つかった水晶が入れられています。流出により国の有形文化財の登録は抹消されてしまいましたが、再建後この景観は「岡倉天心旧宅・庭園及び大五浦・小五浦」として国の登録記念物に登録されました。

五浦の風景は、天心に何を思わせたのでしょうか。ぜひ訪れてみてください。

（日本美術専攻・3年）

ACCESS

茨城県北茨城市大津町五浦727-2
JR常磐線・大津港駅よりタクシー約10分

開館時間
【4月〜9月】8:30〜17:30
【10・2・3月】8:30〜17:00
【11月〜1月】8:30〜16:30
※入場は閉館時間の30分前まで

各地のアート

長野県 諏訪市
【北澤美術館】

長野県諏訪湖畔にある北澤美術館。１階にはエミール・ガレやドーム兄弟、ルネ・ラリックのガラス工芸を、２階では現代日本画をゆったりと鑑賞できます。

大学入学後コロナで上京できず気落ちしていた時に行き、非現実的で美しい作品に癒されていました。ガレの「ひとよ茸ランプ」に誘われるように展示室に入ると、黒い背景に色とりどりのガラス工芸が浮かびあがり、とても幻想的です。ジャポニスムから影響を受けた彼の作品には、植物や昆虫のモチーフが多くあり、生き物への温かいまなざしが伝わってくるようでした。異国フランスで作られたのに、どこか懐かしい自然の風景が思い出されます。都会の喧騒を離れて心和ませたい方におすすめです。

（日本美術専攻・4年）

ACCESS

〒392-0027
長野県諏訪市湖岸通り1-13-28

開館時間
【4月～9月】 9：00～18：00
【10月～3月】9：00～17：00
(最終入館は閉館の30分前まで)

休館日
無休
※2024年3月13日（水）～15日（金）は
展示替えのため休館予定

愛知県 豊橋市
【穂の国とよはし芸術劇場PLAT】

私は地元の劇場である「穂の国とよはし芸術劇場PLAT」を紹介します。美術品という訳ではありませんが、”アート”は人と人の交流を生む面があると思っているのでぜひ目を通していただきたいです。

この劇場は、市民の交流と創作活動の活性化を図るという目的で開館しました。ここでは目的問わず来館者が過ごしやすいように細部まで工夫が凝らされています。

そして何より素晴らしいと感じる点は、市民の人たちがアートに触れられる接点となる企画を提供しているところです。歌やダンス、その他諸々のワークショップを開催したり、プロの演出家を呼んで演劇を創り上げるプロジェクトを主催したりしています。オンラインの日常も広がり、人との関係性が希薄化している今、このような場があることをみなさんに知っていただきたいです。

（古典芸能ゼミ・３年）

ACCESS

〒440-0887
愛知県豊橋市西小田原町123番地

豊橋駅・新豊橋駅　直結
豊橋駅南口から徒歩約3分

開館時間
9:00～22:00

休館日
原則第3月曜日、年末年始

京都府 京都市

【京都府立堂本印象美術館】

1966年10月に堂本美術館として開館し、1991年に建物と作品が京都府へ寄贈され、翌年に京都府立堂本印象美術館として開館しました。この美術館は、京都市北区にあり、金閣寺や龍安寺から近いため、是非観光の際に訪れることをオススメします。

大正から昭和にかけて京都で活躍した日本画家・堂本印象が、美術館の外観から内装に至るまですべてデザインしています。そのため、印象の作品のみならず、建物自体を楽しむことができます。さらに、印象は日本画家でありながら、西洋画や中国絵画を学んでいるため、日本画にとらわれない作風、画題に挑戦しており、どの分野の美術が好きな方でも楽しめる美術館です。

（日本美術専攻・３年）

ACCESS

〒603-8355
京都府京都市北区
平野上柳町26-3

開館時間
9:30〜17:00
(最終入館は閉館の30分前まで)

休館日
月曜日（祝休日の場合、翌平日に）
年末年始（12月28日〜1月4日）

この記事を通して日本各地のアートを巡ってきましたが、
みなさまは『故郷のアート』として思い浮かぶ何かはありますか？
みなさまにとっての故郷はどこでしょうか？

生まれた場所、育った場所、国、国籍。
それぞれ違う軸にはなるかと思いますが、
きっとどこかしらの土地や人々が頭を過ったのではないでしょうか。

我々比芸の学生はここで紹介されたような美術館、モニュメント、
劇場と様々なアートを心の中に置いて、日々の学びの原動力としています。
形のあるものやないもの、それぞれが感じるアートの赴くままに
感性を発揮し、美術・音楽・演劇映像とジャンルを跨いで探究していきます。
そんな学生が紹介したスポットに興味を持っていただいたのならば
ぜひ、旅の目的地の一つにしていただけると幸いです。

――故郷とは心の拠り所だ。

誰が言った言葉というわけでもありませんが、
みなさまの心が赴く場所でのアートを、見つけてみてはいかがでしょうか。

夜のメール

特集

夜は皆さんにとってどのような時間でしょうか？

落ち着くことができたり、寂しく感じたりと人それぞれ感じるものがあると思います。

芸術においても夜は様々な作家の作品に多様なかたちで登場します。

そこで今回は、それぞれが思う夜と関連する作品を比芸生に紹介してもらいました。

美術

『花火』　三年　谷田貝昂生

日本の木版画である江戸の浮世絵は時代が経つにつれ多色刷が中心になり、明治期にはより豊かな色彩へと発展する。それとは対照的に同時代に生きたパリの芸術家、ヴァロットンの木版画は主に白と黒の二色だけで構成された。

今回紹介する『花火』はそのうちの一つでパリ万博で打ち上げられた花火をモデルとした作品である。白と黒の二色であることが花火の光と夜の闇との明暗や、照らされた人々の表情を際立たせている。

『藤原保昌月下弄笛図』

明治の浮世絵師である月岡芳年の三枚続の作品。秋の夜に笛を吹きながら帰り道を歩く保昌に対して衣服を奪おうと盗賊の袴垂が襲おうとする。しかし、保昌には隙がなく手が出せずにそのまま家についてしまう。夜空の落ち着いた色あいの中で明るい色の衣服を身に着けた保昌が印象的で背後に輝く満月と関連させているようにも見える。

音楽

プッチーニ『トスカ』より「星は光りぬ」

三年　森本雪絵

プッチーニのオペラ『トスカ』の第3幕で、カヴァラドッジが歌うアリアです。恋人であるトスカと引き離され、処刑を目の前にして歌う曲です。星空の下で、トスカへの想いや生への渇望を歌うこの曲は、テノールの名曲として知られています。

『Glory Box』

三年　髙麗未歩

英国ブリストルの音楽グループである Portishead の作品。泣き笑いのような寂寞感溢れるベス・ギボンズのボーカルにアイザック・ヘイズの『IKE'S RAP』のサンプリングが絡み合う。遊び相手ではなく女として本気で愛されたかったという痛切な訴えは日々の不自由を代弁するかのようで不思議な安らぎを我々に与えてくれる。音源のミニマルで完成されたサウンドは勿論NY ローズランドでのライブ ver も必聴。

演劇

『グレート・ギャツビー』

♪朝日の昇る前に

三年　宇津城　風夏

スコット・F・ジェラルドの同名小説を舞台化した作品。主人公のジェイ・ギャツビーが昔の恋人を想って歌い上げるこの曲は、夜が更けていく背景も印象的！狂騒の20年代に酔いしれてみるのはいかが…？

BD/DVD 販売元：(株)宝塚クリエイティブアーツ、2022年。

『エリザベート』　♪夜のボート

オーストリア皇后エリザベートの生涯を描いたミュージカル。皇帝夫婦のすれ違う様を2艘のボートに例えたこの曲は、夜の寂しさや切なさを味わせてくれます。彼らの愛はどこに辿り着くのか…。必見です！

BD/DVD 販売元：東宝株式会社、2023年。

ＣｈａｔＧＰＴに聞く芸術

ChatGPTとは、OpenAIが開発した、人工知能を使ったチャットサービスである。このサービスでは、人間の質問に答えるだけでなく、新しいアイデアを提案したり、プログラムのコードを生成したりすることもできる。

今回は実験的に、ChatGPTに芸術作品についての質問をし、その答えが適しているといえるのか、添削を行った。またＡＩを使った他のサービスである「Art Collectionプラグイン」や、「Extrapolated Art」について調査し、芸術とAIについて考えた。

Q2.『鳥獣戯画』の作者は誰ですか？

A.『鳥獣戯画』（ちょうじゅうぎが）は、日本の中世から江戸時代にかけての絵巻物で、特に鳥や獣をテーマにした作品です。この絵巻物は、複数の作者によって制作されましたが、最も有名な作者は藤原定家（ふじわらのさだいえ）です。藤原定家は、平安時代末期から鎌倉時代初期にかけて活躍した日本の貴族で、文化人でもありました。鳥獣戯画は、彼が著した随筆集である「枕草子」（まくらのそうし）に収録されたイラストとして知られています。この絵巻物は、鳥や獣をリアルに描くと同時に、彼らの行動や生態を詳細に描写しています。

鳥獣戯画を描いた作者は、不明とされる。12世紀頃の仏画、図像と共通した特徴を持っていることから、密教図像研究の中心地、三井寺に長く居た鳥羽僧正覚猷を作者とする説が有力である。しかし、各巻の筆致、画風が異なることから、筆者が一人ではないことも明らかとなっている。つまり、『鳥獣戯画』の作者は未だ不明であるため、このChatGPTは誤っている。

また、藤原定家は『鳥獣戯画』と全く関係のない人物である。さらに、『枕草子』の作者は清少納言であるため、藤原定家についての情報にも誤りがある。（『枕草子』にイラストがあるというのも誤り）。ChatGPTはアメリカのベンチャー企業「オープンAI」が開発したソフトであるため、特に日本の情報に間違いが多い可能性がある。また、ChatGPTに覚猷について聞いたところ、僧侶としての情報しか出てこなかったため、『鳥獣戯画』と覚猷との関連自体が見いだせていないと考えられる。

・Art Collectionプラグインについて

Art Collectionプラグインとは、ChatGPTが提供するツールの一種で、メトロポリタン美術館の美術作品を探索することができる。検索結果として得られる情報は、作品のタイトルや作者、制作年、素材、サイズ、そして作品の画像など、非常に詳細である。さらに、異なる美術作品の情報を取得し、比較する機能や、特定の美術作品について深く調査することも可能だという。ChatGPTで芸術作品の情報を集め場合、誤った情報に遭遇しやすいが、Art Collectionプラグインは比較的正しい情報が得られるため、うまく利用すれば作品を探す際、役立つこととなるだろう。

・Extrapolated Artについて

近年、AIの技術を活用して、写真に写った物や人を自動で消した上で、背景を予測して補完するAI編集技術が発達している。このような修正の技能を応用して絵画を拡張するのが「Extrapolated Art」と呼ばれる技術である。

Q2. フェルメールの『真珠の耳飾りの少女』にはカーテンが描かれていますか。

A. 『真珠の耳飾りの少女』には、絵画の背景にカーテンが描かれていません。この絵画は、ヨハネス・フェルメールによって制作されたもので、女性の肖像が美しい光と影で描かれています。背景は暗い空間で、女性の服や宝石が光り輝く中で、彼女の表情やポーズが際立っています。フェルメールの作品は一般的に細密画で知られており、彼が描く背景や空間も慎重に緻密に作り込まれていますが、この特定の作品においてカーテンは観察されていません。

現在の『真珠の耳飾りの少女』の背景はモチーフが描かれておらず、黒で塗りつぶされたように見える。しかし、２０２０年４月、『真珠の耳飾りの少女』を所蔵するマウリッツハイス美術館が、同作に対し初の科学的調査を行ったことにより、新事実が明らかとなった。それは、一見何もない背景に緑色のカーテンが存在していたということである。カーテン部分は「折り重なった布地」のようになっており、数世紀の間に黒く色あせたとされている。また、カーテン以外にも、少女の目の周りには肉眼では見えない小さなまつげが描かれていることも解明された。この調査結果は日本でも話題となり、メディアにも多く取り上げられていたため、ChatGPTが知っていることを期待して質問した。

しかし、結果は「カーテンは確認できない」というものであった。筆者が使用したChatGPT３.５には２０２２年１月までの情報が反映されているとのことであったが、２０２０年の『真珠の耳飾りの少女』の調査について聞いても、調査が存在したことを確認できなかった。このことから、ChatGPTは更新までの情報を網羅しているわけではないということがわかる。

また、他の作品についても聞いたところ、ChatGPTは作品を説明するとき、作品の筆者、描かれているもの、（作品に関するポイントを箇条書き）、作品が与える印象や特徴の順番で回答することが多いと分かった。

フィンセント・ファン・ゴッホ『ローヌ川の星月夜』

これは作品の色彩、筆致、図像をパターン化することで、拡張した世界を構築している。また、この技術はAdobe Photoshopに搭載されているため、特別な技術を必要とせず、誰でも簡単に行うことができる。なお、うまくいかないこともある。

ChatGPTの回答内容を添削してみたところ、絵画について誤った情報が含まれていること、最新の情報は反映されていないことがわかった。またAIによって、絵画について調査したりの誰絵画を描いたりできるということもわかった。従って、AIの台頭は、答えのない芸術をぶ私たちに膨大な情報を提供してくれるものの、信頼性に欠ける可能性があるため、情報を選択する力これまでよりも求められるといえる。

有名すぎるアート

美術、音楽、演劇の各分野のゼミ生から、
「自分の考える有名すぎるアート」をプレゼンしてもらいました！

《オフィーリア》に魅了された日本人

樋口茉莉さん［小林ゼミ（西洋美術）］

鮮やかで繊細に描き込まれた植物。川に浮かんでいるのは、ウェーブの艶やかな髪を広げた、真っ白な顔に赤い唇の少女。《オフィーリア》は、最近の美術関連の書籍でも紹介されるなど、一度は見たことがある人は多いのではないだろうか。作者のJ・E・ミレイは、ヴィクトリア時代の形式的なアカデミー芸術に反発し、純粋な芸術を求め、自然をありのままの美しさで誠実に描くことを目的とした芸術集団であるラファエル前派の一員であった。主題も、かの有名なシェークスピアの『ハムレット』である。

実は、この《オフィーリア》に魅了された明治期の文人がいた。英文学者であり小説家としても知られる夏目漱石である。

漱石は、『草枕』において、この《オフィーリア》を印象的に描いている。「ミレーのオフエリアも、こう観察すると大分美しくなる。（略）それで両岸にいろいろな草花をあしらって、水の色と流れていく人の顔の色と、衣服の色に、落ち着いた調和をとったなら、由主度画になるに相違ない。」これは画工である主人公が、湯に浸かりながらオフィーリアのことを想像するシーンである。

《オフィーリア》から、細部の描写や女性像、色彩にラファエル前派の精神を見出して、単なる作家の趣味には止まらないほどに見事に文学に昇華している。

《オフィーリア》は海を超え、ジャンルを超え、ラファエル前派という芸術の精神と感性を東洋の島国に生まれた一人の作家に与えていたのである。

【参考文献】
・ローランス・デ・カール著、高階秀爾監修、村上尚子訳『ラファエル前派 ヴィクトリア時代の幻視者たち』創元社、2001年
・稲垣瑞穂『漱石とイギリスの旅』吾妻書房、1987年

ジョン・エヴァレット・ミレイ《オフィーリア》1852年、油彩、カンバス、76.2cm×111.8cm、テート・ブリテン、ロンドン

ヤン・ファン・エイク《アルノルフィーニ夫妻像》

上杉七海さん［水野ゼミ（西洋美術）］

イギリスの美術館ナショナルギャラリーに所蔵されている《アルノルフィーニ夫妻像》は、画題の夫婦の背景に描かれた、凸面鏡の存在が特に有名です。実際ナショナルギャラリーでは、みんなスマートフォンを掲げ鏡の部分を拡大して撮るほど。そんな鏡の中には画家ヤン・ファン・エイクの姿が描かれています。これまで存在を主張してこなかった画家の存在が主張し始めた作品なのです。

さて《アルノルフィーニ夫妻像》でも鏡の他にも様々なモチーフが描かれています。今回はその中でも夫妻の頭上に描かれたシャンデリアの存在についてご紹介しましょう。このシャンデリアをよく見ると、ろうそくは1本しか立っていません。「ろうそく1つが部屋を照らす」という構図はキリストが世界を照らすという宗教観を表したもの。ろうそくは夫側に描かれていますが、これは夫妻の手元を見るとその答えがわかります。夫に自らの手を重ねる妻の手元の構図は相手に身を委ねる意図を表すため、キリストに導かれる人々の姿を示しているのです。身を委ねられる側である夫を疑似的にキリストと重ねているからこそ、ろうそくは左に描かれているのでしょう。

《アルノルフィーニ夫妻像》にはシャンデリア以外にもたくさんのモチーフが隠れています。是非この名画に描かれた寓意を見つけ出してみてはいかがでしょうか。

ラファエロ《アテネの学堂》

木村美陽さん
［水野ゼミ（西洋美術）］

ラファエロの《アテネの学堂》。歴史の教科書などで一度は目にしたことがあるだろう。ヴァチカン宮殿内の四つのラファエロの間、その中の署名の間に描かれた四枚の壁画のうち最も有名な作品である。その四作は古代ギリシャの精神をキリスト教世界に引き寄せ、融合させたカトリック教会の要請によるものであった。それぞれの作品は天井画とリンクして詩学・法学・哲学・神学を表し、《アテネの学堂》は哲学に相当する。

テーマの通り、作品には古代ギリシャ・ローマ時代の哲学者が描かれている。中心にいるプラトンとアリストテレスを始め、現在も考察がなされている哲学者たちの姿は、古代ローマ風のアーチの下シンメトリーに近い構図で配置されている。ルネサンス三大画家の一人に数えられるラファエロの技術は、もちろん穏やかで精緻な人物表現に遺憾なく発揮されているが、背景の精巧な遠近法も忘れてはいけない。ルネサンスは遠近法が発展した時代である。《モナ・リザ》の空気遠近法、《最後の晩餐》の線遠近法と、レオナルドも採用した手法の内、ラファエロがこの作品で取られているのは線遠近法であった。彼は作品の制作段階で未完だったサン・ピエトロ大聖堂の完成図を基に、この背景の建造物を描いた。五メートル×七メートルもあるこの作品と同じ大きさの下絵から制作し、彼はルネサンス美術で培われた技術の粋となる絵画を描き上げたのだ。

尾形光琳《風神雷神図屏風》

小田部真於さん
［出光ゼミ（日本・東洋美術）］

尾形光琳の描いた「風神雷神図屏風」は、右側に風神、左側に雷神が描かれた2双1曲の屏風である。風や雷といった、人間には抗えない自然の大きな力を、神の姿を借りて描いている。また、もともと俵屋宗達が描いた国宝「風神雷神図屏風」（京都・建仁寺蔵）を、光琳が忠実に模写した作品とされる。実は、作品保存のため、表と裏に分けられ、現在はそれぞれ別の屏風となっている。そして、この作品の裏面には酒井抱一の「夏秋草図屏風」があり、抱一があとから描き加えたとされている。しかし、左右を入れ替えた「夏秋草図屏風」を「風神雷神図屏風」に重ねてみると、新たな図像が生まれる。雷神と風神の足元には夏秋草が置かれ、被らないように配されている。また、雷神の側には雨に打たれた夏草が、風神の側には、風神が巻き起こした風に吹かれているかのように秋草が描かれている。このように、抱一は光琳の「風神雷神図屏風」に沿って「夏秋草図屏風」を描いたという説もある。

酒井抱一《夏秋草図屏風》

山中 彩穂吏さん
［出光ゼミ（日本・東洋美術）］

前に述べた『夏秋草図屏風』（江戸時代、19世紀）は、雨に見舞われる夏草と強風に靡く秋草を描いた酒井抱一の作品である。夏草図は、夕立に打たれる草木の様子を水を用いて描き、秋草図は、風に打たれる山葡萄の紅葉を描いている。

しかし、これまで雨によるものであるとされてきた夏草図上部の川をよく観察すると、7つの小さな点が見受けられる。これが北斗七星＝天の川であるという説が、とある学生によって提唱された。またこのことから、この作品は「乞巧奠」という七夕行事で用いられたのではないかと考えられているが、未だはっきりとは解明されておらず、引き続き研究が進められている。

さらに、本作の下絵が発見され、共に見つかった張り紙の内容から、一橋家の注文により抱一が文政4年（1821）に描いたことがほぼ確実となった。

奈良の大仏
（東大寺大仏殿廬舎那仏座像）

吉本伊吹さん
［津田ゼミ（日本・東洋美術）］

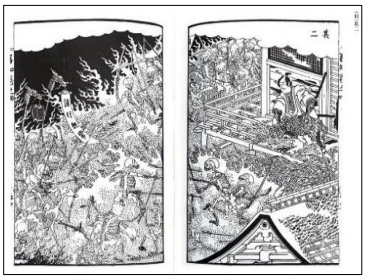
筆者がこの文章を書いている時点で、誌面に写真か挿絵みたいなものが載っているのかどうか分からないが、そんなものがなくとも「奈良の大仏」と言われれば誰もが思い浮かべることができるだろう。「有名すぎる作品」というテーマで皆さん書かれているのだろうが、誰よりも有名なものを引っ張り出してきた自信がある。奈良の一大観光名所である大仏だが、実は最初から今の形だったわけではない。奈良時代、聖武天皇の発願で造られた大仏は、855年の地震や平重衡による南都焼討、戦国時代の争乱といった災難に見舞われ、損壊と修復を繰り返してきた。つまり今現在、私たちが見ることのできる大仏は、それぞれの時代に大仏を守ろうとしてきた人々の歴史の積み重ねであるということなのだ。諸説あるが、大まかに脚部と台座のみが建立当初のものであるとされ、それ以外は後代の補修によるものとされる。また、それらの災難がすべて悪いことというわけではなく、平重衡による南都焼討からの復興は運慶をはじめとする慶派仏師たちの活躍の場ともなった。悠久の時を過ごしてきた大仏が目にしたであろう歴史の重みを感じながら、もう一度奈良の大仏を見に行かれてはいかがだろうか。ちなみに大仏殿へ向かう途中の南大門の脇にはアリジゴクが生息していて、コツを掴めば捕獲できる。

東大寺オフィシャルサイト
https://www.todaiji.or.jp/information/daibutsuden/

《相馬の古内裏》

谷田貝昂生さん
［津田ゼミ（日本・東洋美術）］

二枚の画面にわたるほど巨大で、今にも人間に襲い掛かりそうな骸骨に見覚えがある人も多いのではないでしょうか。不気味さと迫力を感じさせる一体の巨大な骸骨が印象的なこの浮世絵は江戸後期に活躍した浮世絵師、歌川国芳によって描かれた『相馬の古内裏』です。この作品は現在は廃墟となってしまった平将門のかつての屋敷を舞台に諸国武者修行中の大宅太郎光国と平将門の遺児で、妖術を操る滝夜叉姫が戦う場面を表しています。また、江戸時代の読本『全知安方忠義伝』に取材し、歌川豊国が描いた2つの挿絵を組み合わせて描かれています。しかし、実は元の読本の挿絵には無数の骸骨が描かれており、一体の巨大な骸骨は登場しないのです。国芳は無数の骸骨を大胆にも一体の巨大な骸骨に集約させることで迫力のある画面を生んでいます。その他にも骸骨の白色と画面全体の色彩の対比、西洋の人体の解剖図を参考にしたような骸骨のリアルな描写など特筆すべき点がいくつもあり、そこからは国芳の創意工夫がうかがえます。



歌川豊国 筆『善知安方忠義伝』
大宅太郎光国、相馬の旧御所にいたり、妖怪をこころむ。
其二 文化3年（1806年）19.2cm×13.2cm

歌川豊国 筆『善知安方忠義伝』
大宅太郎光国、相馬の旧御所にいたり、妖怪をこころむ。
其七 文化 3 年（1806 年）
19.2cm×13.2cm

歌川国芳 筆『相馬の古内裏』 弘化 2，3 年（1845〜46）頃 東京富士美術館蔵
大判錦絵三枚続 左：37.4×25.1cm 中：37.4×25.4cm 右：37.5×25.9cm

童謡・唱歌《むすんでひらいて》

南直冴さん
［那須ゼミ（西洋音楽）］

この文章を読む方の多くは、小さい頃に《むすんでひらいて》という曲を、友だち同士や親子でよく歌って踊っていたのではないでしょうか。僕も幼稚園の頃、そういう陽気で快活な同級生たちを横目に、教室の隅で陰に隠れて本を読んでいました。

この曲をつくったとされるのが、フランス革命思想の提唱者、ジャン・ジャック・ルソーであるというのはご存じでしょうか。『社会契約論』を著した哲学者・思想家としての側面は有名ですが、彼が作曲家であったということは、初めて知る方も多いかもしれません。

しかし、彼は実際、音楽家としても華々しい功績を収めています。オリジナルの記譜法を発明し、その普及を目指してパリに上京。フランス啓蒙思想の集大成『百科全書』には多数の音楽用語の項目を寄稿し、彼独自の音楽辞典も刊行。また生涯にわたって作曲活動も行い、晩年は「オテロ」の「柳の歌」を作曲中に死を迎える。彼の人生は常に音楽とともにありました。

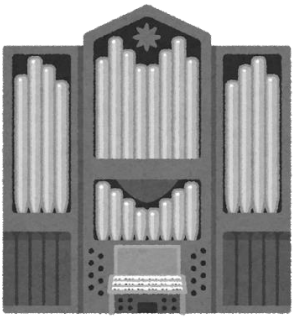
その中でも、特に成功を収めたのがオペラ《村の占い師》であり、もとは幕間劇であったものが国王ルイ15世の前で上演され、単独のオペラとして西欧、アメリカ各地で上演されました。この作品の第8場にあてられた曲が、かの《むすんでひらいて》の原曲と言われています。僕が幼稚園生の当時に読んでいた本が『ルソー全集』だったら、《むすんでひらいて》を歌う園児たちとルソーの思想について語り合い、友人をつくれたかもしれないと思うと、悔やんでも悔やみきれません。

J.Sバッハ《トッカータとフーガ ニ短調》

椎名珊瑚さん
［那須ゼミ（西洋音楽）］

「バッハの曲の冒頭を歌ってください」こんなアンケートを実施したら、おそらくこの曲が1位になるのではないでしょうか。タイトルを見て何の曲？と思われたみなさんも、多分これでどの曲かお分かりでしょう。印象的なフレーズから始まるこの曲は、バッハの作品としてもパイプオルガンの名曲としても大変有名です。

その一方で、実はバッハの作品ではないのではないか、という説があるのもご存知でしょうか。さらには、もともとオルガンのための曲ではなかったとする説まであるのです。理由としては、その他のバッハ作品との相違点が多い点、バッハの作品には珍しいことではないものの自筆譜が残っていない点などが挙げられています。いったい真相はどうだったのでしょうか。この機会に、みなさんもバッハ作品を聴き比べて考えてみませんか？



ドビュッシー〈月の光〉

税所航紀さん
［広瀬ゼミ（西洋音楽）］

私が紹介する作品は、ドビュッシーにより作曲された〈月の光〉という曲です。誰もが一度は聞いたことがあるであろうこの曲は、『ベルガマスク組曲』というピアノ曲集の第3曲です。曲名にもなっている月の光は、詩人ヴェルエーヌの詩集である『艶なる宴』の「月の光」という詩が由来となっています。ヴェルエーヌの哀しみが入り混じった世界観を描いたこの曲は今も人気がありますが、実は、ドビュッシーはこの以前にも「月の光」を基にした別の歌曲を創作していたということをご存じでしょうか。この詩を気に入ったドビュッシーは、初めに、親交のあったヴァニエ夫人に献呈する歌曲の中でこの詩を用います。そして、1891年になると、この曲はヴェルエーヌの詩集『艶なる宴』による歌曲集の一曲として改定されました。このエピソードからもドビュッシーがどれだけこの詩に惹かれていたかが伝わってきます。ヴェルエーヌのニュアンスを重視した観念的な表現は、ドビュッシーの、規則にとらわれずに純粋な美しさを追及する、という音楽への姿勢に大きな影響を与えました。このように美しい表現を徹底的に追い求めて、優雅さと哀しみが一体となった絶妙な雰囲気の曲を作り上げたことが、今も〈月の光〉が多くの人に受け入れられている理由であると考えられます。

ルートヴィッヒヴァン　ベートーヴェン《交響曲第9番二短調　合唱付き》

岡田ののかさん［広瀬ゼミ（西洋音楽）］

私が紹介する有名すぎるアート作品は、誰もが聞いたことのある年末の定番曲、ルートヴィッヒヴァンベートーヴェン作曲《交響曲第9番ニ短調　合唱付き》です。ベートーヴェンが1番最後に作った交響曲がこの第九で、実は、クラシック音楽史のなかで交響曲第9番は呪われているといわれているのはご存知でしょうか。実際、ベートーヴェン、シューベルトやブルックナーといった歴史に名を遺す音楽家たちは、交響曲第9番を発表したのちに次々と死亡しているのです。本当に呪いなのかどうかはわかりませんが、共通して第10番を作曲できず死んでしまっているというのは何故なのか気になります。この曲の第4楽章に登場する歓喜の歌は誰もが1度は耳にしたことのあるのではないかと思いますが、第1楽章から3楽章もそれぞれ個性的でほとんど耳が聞こえなくなってしまっていたベートーヴェンが作ったとは思えない魅力的な音楽となっていますので、ぜひ一度全楽章を通して聴いてみていただきたいです。

ウィリアム・シェークスピア『ロミオとジュリエット』

内海帆乃夏さん［井上ゼミ（西洋演劇）］

悲恋の物語といえば何を思い浮かべますか？ウィリアム・シェークスピアの『ロミオとジュリエット』を思い浮かべる方も多いのではないでしょうか。「おおロミオ、あなたはどうしてロミオなの」というあまりに有名すぎるセリフは一人歩きをしていますし、周囲の反対がかえって恋に盲目にさせてしまう“ロミオとジュリエット効果”という心理現象用語があるほどそのタイトルは有名です。

仮面舞踏会で許されぬ出会いをした二人は、運命に翻弄されるかのように死へと転げ落ちていきます。二人を応援していた神父の提案で、ジュリエットが仮死状態になり迎えに来たロミオと駆け落ちをする計画でしたが、肝心の計画の連絡が届かなかったロミオは本当にジュリエットが死んでしまったと勘違いし、ジュリエットの横で自殺します。そして目覚めたジュリエットは自分の隣で息絶えているロミオを見て、同じく自殺をしてしまうのです。

戯曲を元に、バレエ、オペラ、ミュージカルと展開されているのでご存じの方もいらっしゃるかと思いますが、実は二人が出会ってから死ぬまでの期間はなんとわずか5日！5日程度の恋に身を焦がしあっさり命を落とすなんてもったないと感じますか？命を懸けていいと思える恋を5日で育めるなんて幸せだと感じますか？

『ライオンキング』

眞仁田莉子さん［井上ゼミ（西洋演劇）］

アフリカの広大なサバンナで繰り広げられる物語、ウォルト・ディズニーの『ライオンキング』は、読者の皆様にもおなじみの作品ではないでしょうか。本作は、1997年に演出家ジュリー・テイモアによってミュージカル化され、ニューヨーク・ブロードウェイで初演を迎えています。1998年には「最優秀ミュージカル賞」をはじめとする数々の栄誉ある賞を受賞するなど、高い評価を受け、世界各国で上演されるようになりました。

日本では、1998年12月20日に劇団四季によって公演がスタートし、現在もロングラン公演を続ける不動の人気作品となっています。

さて、皆様は、ミュージカル『ライオンキング』に“ご当地ならではの演出”があることをご存じでしょうか。愉快な仲間であるミーアキャットのティモンとイボイノシシのプンバァは、東京公演では「江戸弁と女言葉」、札幌公演では「北海道弁」、名古屋公演では「名古屋弁」、大阪公演では「大阪弁」というように公演地に馴染みのある口調で演じられています。

1997年の初演時にブルックリン訛りの英語が用いられたことから「一貫した信念」として日本でも訛りの演出が取り入れられるようになりました。この”ご当地ならではの訛り”がティモンとプンバァの親しみやすい雰囲気に繋がっていると考えられます。ぜひ、いつもと違う公演地でミュージカル『ライオンキング』を観劇しに行ってみてはいかがでしょうか。

谷川俊太郎

中尾悠真さん
［佐藤ゼミ（日本古典芸能）］

谷崎潤一郎ではありません。谷川俊太郎です。とても重大なことなので間違えないでください。スイミーの翻訳が有名な谷川俊太郎ですが、翻訳家だけでなく、作詞家、絵本作家、脚本家としても活躍しています。意外と知らない人も多いですが、実は手塚治虫原作のアニメ「鉄腕アトム」の主題歌の作詞や大人気キャラクターであるスヌーピーの原作漫画「ピーナッツ」の翻訳も手掛けています。その他にも学校の教科書などで谷川俊太郎の名前を目にしたことがある人は多いでしょう。私は「あいうえおのき」というレオ・レオニ著、谷川俊太郎訳の作品が特にお気に入りです。彼の作品にはひらがなばかりで子供が読むような詩もあれば、死についてのような仄暗い詩もあります。ちょっぴりエッチな詩もあったりします。私は彼の詩から感じる言葉そのものが持つ素朴なリズムと情緒的な静けさが大好きです。彼は意外にもスマートフォンやマックブックを積極的に活用しているそうで、インターネットで詩の朗読を見ることもあるそうです。皆さんも、ぜひインターネットを使って彼の作品に触れてみてはいかがでしょうか。

寺山修司と母

一條日和さん
［佐藤ゼミ（日本古典芸能）］

劇団「演劇実験室◉天井桟敷」の主宰である寺山修司。寺山の活動は短歌や詩、小説、シナリオ、ラジオ、競馬評論、映画監督など多岐にわたっています。短歌は国語の教科書にも掲載されており、寺山独自の刺激的かつ土着要素のある作品に新鮮さを感じ、魅了される者は未だ絶えません。前衛的な寺山作品。そのキーワードとなるのが“母”です。寺山作品では“母”の存在が頻繁に取り上げられます。寺山の自伝的代表作『田園に死す』では、故郷を捨てて上京した現在の自分が過去の自分がいる故郷に戻り、今の自分はどうなるのか確かめるために過去の母を殺そうとしますが、結局母を殺すことができず、母の元に帰り、食事を共にして、「たかが映画の中でさえ、たった一人の母も殺せない私自身とは、いったい誰なのだ？」と問いかけ、完結します。この場面の仕掛けは、記憶を消して、再び初見を味わいたくなるほどの場面です。寺山は、“母”に対する負の感情、トラウマを多くの作品にしました。しかし、実際の寺山は母を大事にしていたのです。寺山の母に対するジレンマや葛藤がわかります。“母”そのものの存在の大きさから逃れることはできないのです。寺山修司は今年で没後40周年を迎えました。ぜひ、今の多感な時期に、刺激的な寺山ワールドを覗いてみてはいかがでしょうか

『トイ・ストーリー』1995

北村祐樹さん
［三浦ゼミ（映像・映画）］

ピクサー映画第一作。世界初のフルCGアニメーション映画。

いまや世界中の子供達に親しまれるピクサー映画であるが、振り返ってみれば、労働者のモンスター達が子供のために奔走する『モンスターズ・インク』や、技術職の青年がサーカス団と組んで共同体を守る『バグズ・ライフ』など、初期ピクサー作品の主人公は「親」や「労働者」目線の人物であることがほとんどだ。本作のおもちゃ達も、アンディを楽しませる「親」であり、チームでその仕事に従事し続ける「労働者」でもある。

なぜピクサーは子供向け映画とされる本作で「大人」の物語を描いたのか。そこには、CG製作ソフトの開発者集団から始まり、スティーブ・ジョブズの下でコンピューター会社として設立された、ピクサーという企業の成り立ちが大きく関わっている。

かつてオタク青年だった技術者たちが、親になり家庭を持った。そんな彼らが選んだ道が、それぞれの個性を結集してチームを組み、「CGアニメ」というおもちゃを使って子供達を楽しませる事だった。ピクサー映画は、「親」として「労働者」として、組織の中で子供達のために人生を捧げる、アニメーター達自身の物語でもあるのだ。

そうしたテーマの持つ普遍性が、「子も親も楽しめる」ピクサー作品として結実した。そんな彼らの初期衝動がつまった本作こそ、コンピューター時代の幕開けを告げる歴史的傑作であると言えるだろう。

ご協力ありがとうございました！

せんせい先生コラム×原点回帰

今号のテーマ

毎号のテーマに沿って比較芸術学科の先生に語っていただくコーナーです。今年は「原点回帰」ということで、「学生時代に私をかえた作品」をご紹介いただきました。

西洋美術学　水野千依　先生

ピエロの聖母

学生時代は今より感受性が強かったからか、ジャンルを超えて多くのものに感化されました。大学近辺には、今は姿を消してしまった小さな映画館がいくつもあったので、鈴木清順、寺山修司、ゴダール、ヌーヴェル・ヴァーグ…と、時を忘れて見入ったことを懐かしく思います。なかでもタルコフスキーの『ノスタルジア』は、見終わった時に席から立てず、そのまま三度も見続けたほどの洗礼を受けました。霧のかかったイタリアの田園風景が、サン・ガルガーノの廃墟と化した聖堂や主人公のロシア詩人の故郷の心象風景と重なり、見るものに普遍的な原風景として刻印される、そんな印象を受けました。詩人を案内するロシア人女性がふと立ち寄ったロマネスク聖堂の地下礼拝堂では、村の女性たちが揺れる蠟燭の灯のなか聖母像を厳かに運び、安産を祈願する儀礼を執り行います。

一人の女性が聖母像に触れると、その腹部が開かれ、目に見えない神の子の代わりに、聖霊の恩寵さながらそこから何羽もの白鳩が放たれる。動かないはずの彫像の生動化、ズームアップで映し出されるピエロ・デッラ・フランチェスカの聖母像の端正な顔……その美しい記憶は、無意識にも今の私の美術史研究のなかで息づいている気がします。

日本・東洋の美術学　出光佐千子　先生

私にとっての原点回帰

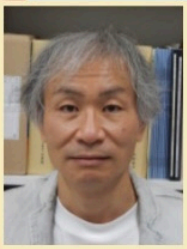
池大雅の国宝「楼閣山水図屏風」です。

金屏風に群青で波のうねりが描かれているのですが、湖面から深い波底の群青が透けて見えていて、大学院に進学したばかりの私は、波に飲み込まれそうになりました。円山応挙のリアルな世界に引き込む迫力ある描写の秘密を研究したくて、東京国立博物館に「波濤図」（金剛寺）を見に行ったのですが、応挙の波は美しく整いすぎていて、何も音が聞こえてきませんでした。その対面に飾ってあったこの屏風の波に衝撃を受けてしまったからです。それもそのはずで、大雅は湖を描くのに、琵琶湖に何度も足を運んで水の動きを観察し、写生派を打ち立てた応挙はほとんど旅らしい旅はせず、アトリエにこもって絵の構想を練っていたのですから。心まで揺らされる体感する、大雅芸術と出合い、「写生って何だろう」というシンプルな疑問が私の生涯の研究課題となりました。

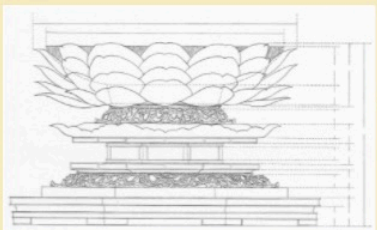
ところで、この国宝ですが、明治までは贋作って思われていたのを、団琢磨が購入して、これは国宝級だからと東博に寄贈したという凄いエピソードもあります。大雅研究がいかに伝説に偏っていたかを物語ります。

あれから30年、気がつけば、私も大雅晩年の年齢に近づいてきたと思っていたら、2023年に大雅生誕300年が来てしまいました。まさに原点回帰！来年の2月から出光美術館で始まる「池大雅―陽光の山水」展には、「楼閣山水図屏風」もお借りします。お楽しみに！

日本・東洋の美術学　津田徹英　先生



天喜元年（一〇五三）に制作された平等院鳳凰堂本尊の「台座」をあげたい。学部三年生の折、ゼミの先生であり、のちに日本彫刻史研究の師となる紺野敏文先生（一九三八～二〇一九）から、岩波書店から当時刊行準備中であった『平等院大観』彫刻編における「台座」の解説を執筆するにあたり、真横から見た台座の正確な見取り図を作成して欲しいと唐突に言われた。正確な見取り図作成の経験はなかったが、勉強の機会と考え、引き受けることにした。その頃、台座の詳細な実測値は『日本彫刻史基礎資料集成 平安時代造像銘記篇』巻六（中央公論美術出版、一九六八年）しかなく、それに基づいて原図は実物の十五分の一で仕上げた。掲出のそれは提出時に手控えとしてコピーしておいたものである。



作図した見取り図は『平等院大観』第二巻（一九八七年）の「台座」解説（三二頁）に添えられている（作成者の名前が記されることはなかったが、間違いなく私の斯界デビュー作である）。作図にあたって痛感したのは、実物を前にして各部を意識的に観察し、どのような表現になっているかの理解なくしては正確な見取り図は描けないということである。以後、今日まで作品の「かたち」を正しく把握するべく、必ず調査現場では作品を詳細に眺めて形状記述を行い、特徴的と思われる箇所については見えた通りに短時間でスケッチすることを自分に課している。その原点がまさしくこの「台座」なのである。

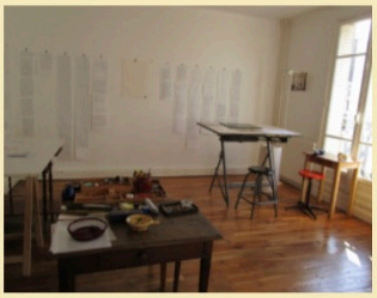
映像・映画学　三浦哲哉　先生

『荒野のカウボーイ』という学生映画です。
大学二年生になったとき、映画サークルの新歓イベントでかかっていたこの8mm映画をなにげに見たら、ものすごく面白くて。自分の薄っぺらな知識などではまったく歯が立たないような、厚みというか奥行きがあることを感じました。単なるおふざけとかパロディではまったくなくて、クラシックな風格のようなものがちゃんとありました。でも、どうすごいかをまだ自分は言えない、というかんじ。
そのあと監督にお会いしたら、サークルの牢屋主みたいな、８年生の先輩で。部室に寝泊まりして夜中にシェイクスピア全集とか蓮實重彦の本を読んでいらっしゃった。ちなみに、後年、NHK大河ドラマの演出なども手掛けられるようになるひとです。この作品が、映画の世界への架け橋だった気がします。これを見て、サークルに入って、そしたら自分と似たようなやつがたくさんいて、どっぷり映画漬けの日々が始まり……いまに至ります。
それまで何をしていたかというと、ゴルフサークルに入っていまして。打ちっぱなしでクラブを振って、あとはひたすら酒を飲む。その日々は楽しくもあったけれど、空しさがだんだん募ってきまして。何をしているんだろうと。『気狂いピエロ』の前半のジャン＝ポール・ベルモンドの気分ですね。集中的に映画を見るようになったのもその頃です。そして、『荒野のカウボーイ』に出会い、こっちだな、と。
なんでゴルフサークルに入ったかというと、大学で最初にできた友だちに強引に誘われたからです。やっぱり友だちとサークル選びをしてはダメ。

西洋演劇学　井上由里子　先生

学生時代に私を変えた作品
人生何があるか分かりません。それは、私の大いなる勘違いから始まりました。
かれこれ20年前、ベルギー留学中の私は修士論文のテーマを決めかねていました。気になる劇作家の名前が思い出せないでいたのです。そこで、頭文字Nというおぼろげな記憶をたよりに、ノヴァリナの芝居を観に行くことにしました。パリで話題の新作です。
幕が開くと、ぽんぽん繰り出されるアクロバティックなフランス語。極東の島国からの留学生にはチンプンカンプン。

ところが、客席では爆笑の渦、スポーツ観戦さながらの熱気が充満しています。私の知らない何かがある。この直感が、ライフワークとなるノヴァリナ研究の始まりです。ちなみに、Nさんが別人と判明するのはずっと先のこと。
その作品の題名は『舞台』(La Scène)で、同音異義語の「セーヌ川」(la Seine)と「最後の晩餐」(la Cène)が掛けられています。あー、なんでこんな難しい作家を選んでしまったんだと、後悔したこともしばしば。でも当時の私には歯が立たない代物だったからこそ、未知の世界への扉が開かれることになりました。今はセレンディピティに感謝しています。
写真はノヴァリナのアトリエ。テクストを壁に貼って編集する段階です。空間の中で言葉を「測量」するのだとか。



日本古典芸能学　佐藤かつら　先生

「初めての歌舞伎座」
授業で何回か話しているのですが、平成6年（1994）12月、自分が学部2年生の時に初めて観た歌舞伎によって、未来が変わったと思っています。私は新潟の片隅の出身で、それまで興味はありましたが歌舞伎を観たことがありませんでした。きちんと調べた結果、平成6年12月歌舞伎座昼の部は「義賢最期」「京鹿子娘道成寺」「上州土産百両首」でした。道成寺での坂東玉三郎さんの美しさと背後の物語の妖しさにぼーっとなり、「上州土産…」では号泣したことを覚えています（内容はあえて書かないので、興味のある人は調べてみて下さい）。

主役二人は三代目市川猿之助さんと十八代目中村勘三郎さん（当時勘九郎）でした。その時見た席は三階Bの一番上、しかも補助席（当日券、学生料金）、パイプ椅子でした。2000円だった気がします。自作のお弁当持参でした。連れて行ってくれたのは学科の先輩（夫）です。
それまでは自分が歌舞伎の研究をするとか、日本芸能史についてみなさんにお話をするなどということは、全く考えていませんでした。まあ、その歌舞伎を見たときもそのような具体的なことを考えたわけでは無く、「歌舞伎に携わっていたい！」と強く思っただけなのですが。その後もさまざまな紆余曲折があって今ここにいます。今思い返しても、あの時、あの作品を観たことは、運命的でした。

西洋音楽学　那須輝彦　先生

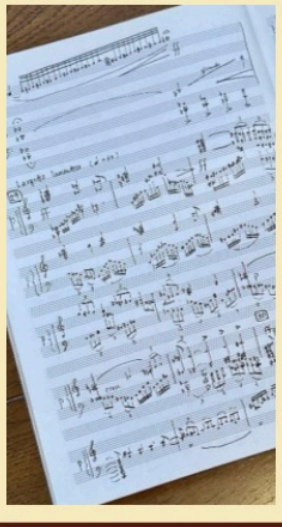
トマス・モーリィ〈さぁ五月祭の月だ Now it the Month of Maying〉。シェイクスピア時代のマドリガルという曲種。遊山の愉しみを５声のア・カペラで歌う。曲ももちろん素敵だが、那須を変えたのは男声六重唱団キングズ・シンガーズ（KS）の演奏。大学の合唱団でこの曲を歌っていた那須は、彼らの日本デビュー盤（1977）に同曲を見つけ、買って針を降ろしたのである――これが同じ曲だろうか……。その芸達者ぶりに度肝を抜かれ、「あっそーいう曲だったの！」と目からウロコ。音楽には相応しい演奏様式があって、活かすも殺すも発声や芸ぶり次第ということに開眼した。

KSの名は合唱の名門ケンブリッジ大学キングズ・カレッジ聖歌隊の出身者であることにちなむ。英国の伝統的聖歌隊はソプラノは少年、アルトはカウンターテナー（男声ファルセット）を使うので、KSもトップ2人はカウンターテナーで、中世の教会音楽からジャズ・ロックまでなんでもこなす。

もともと聖歌隊がそうなのである。少年時代からの基礎のうえでの遊び。ためしにYoutube で Kings College Suscipe と Kings Men Get と検索してみるがよろしい。ほぼ同じメンバーが同じ礼拝堂で17世紀の教会音楽とビーチボーイズを歌っている。

西洋音楽学　広瀬大介　先生

普通ならばシュトラウスの《ばらの騎士》だったり、ワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》だったり、というあたりを挙げるんですが、なんかそのへんの話はあっちこっちでしてるし、皆さんも「ふーん、まあそうだろうねー」って感じできっと意外性もないでしょう。

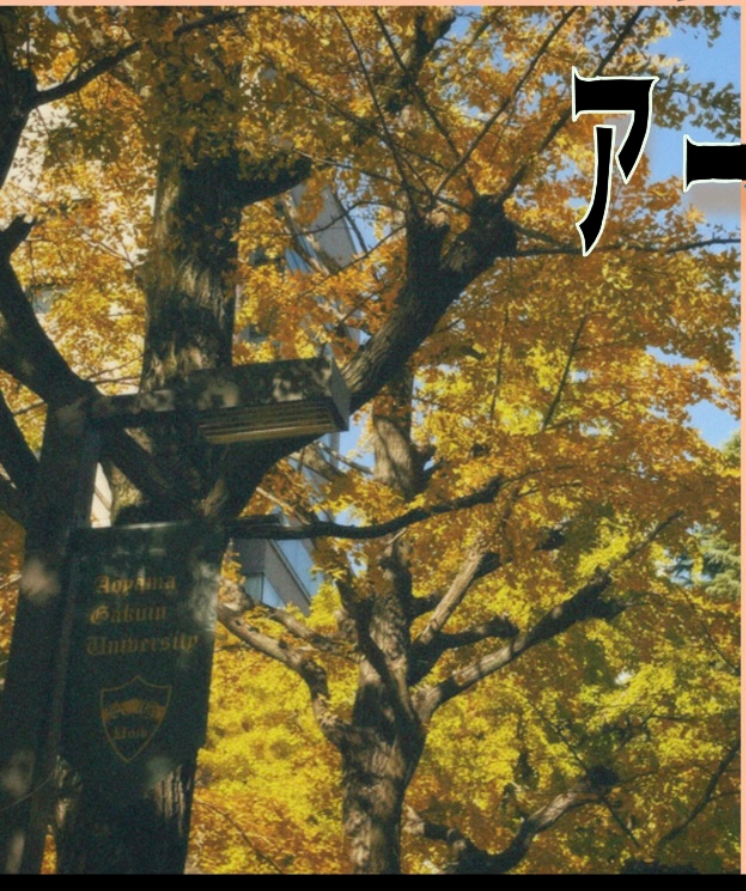


今回は、お題にある「学生時代」というのを、大学生だけでなく、中高生まで含む、と広義にとらえることにします。虚弱体質だったので、図書室にある近代文学とかを片っ端から読むもやし少年でしたが、自然主義とか白樺派は(自分がふにゃふにゃしてたくせに)軟弱な奴らめ、みたいな謎の怒りを覚えながら読んでいました。おそらくは同族嫌悪。

プロレタリア文学とかも、文学なんだからもっとファンタジー感じさせろよ、みたいな謎の反発を覚えていた記憶。ちょっと普通でない、耽美的な美の燦めきに憧れるのは昔からで、谷崎潤一郎とか三島由紀夫こそ日本語の、日本文学の極北だ！とか興奮してました。ひとりで歩きながら、誰にも聞こえないように「金閣を焼かねばならぬ」とかつぶやいてたと思います。ホントヤバい(黒歴史1)。とくに三島の『豊饒の海』四部作なんか、あまりに影響を受けすぎて曲まで作ってました(黒歴史2；写真参照)。のちのち、ワーグナーの『ニーベルングの指環』四部作とかにハマるのもむべなるかな。あれ、やっぱり音楽の話に戻ったな……(笑)。

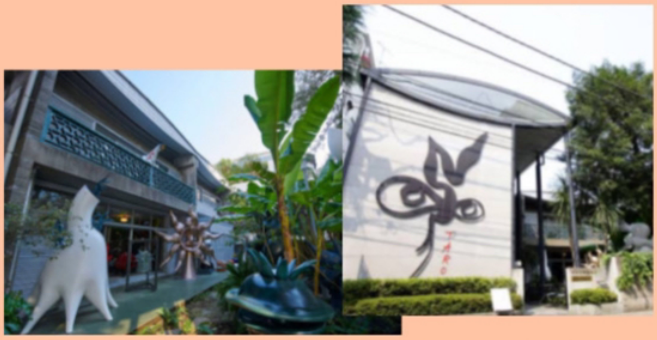
お写真および寄稿いただいた先生方
ご協力ありがとうございました。

青学周辺のアートスポット



渋谷を中心に
様々な文化と芸術を
リアルタイムに間近で
感じられる最高な大学！
青山学院大学周辺の
アートスポットを紹介します。

岡本太郎記念館



『太陽の塔』や『明日の神話』などの作品を残し、20世紀の日本を代表する芸術家の一人である岡本太郎。彼のエネルギッシュな人生の片鱗に触れることのできる場所が、青山学院大学の近くに存在します。

青山学院大学から歩いて約10分。ここ、岡本太郎記念館は、彼が42年に渡って暮らし、制作活動を行った南青山のアトリエを改装して作られました。館内には岡本の作品を展示するためのスペースはもちろんのこと、実際に彼が人生の時間を過ごしていた空間ならではの見どころがいくつもあります。

例えば、制作に使用していた絵具や道具、描きかけの作品が当時のまま残されているアトリエや、多種多様な植物が生い茂り、彫刻たちがごろごろと放り出された情熱的な庭。特に、「まさかご本人登場か!?」と錯覚するほど再現度MAXな岡本マネキンの佇むサロンは絶対におすすめです。

また、一階ホールに併設されたミュージアムショップにはたくさんの愛らしいグッズが並び、まだまだ余韻に浸りたい我々の心を満たしてくれます。ここで岡本の世界観をお持ち帰りしてみてはいかがでしょう。

もしもあなたが閉塞的な日常に疲れてしまったときは、岡本太郎記念館という非日常の扉をそっと叩いてみてください。岡本の作品に、空間に、きっと大きなパワーをもらえること間違いなしです。こうして彼の芸術は人々に生きるエネルギーを与え、岡本太郎という存在は次の時代へと生き続けていくのです。

開園時間
10:00～18:00
（最終入館17:30）
休館日
火曜日（祝日の場合は開館）、年末年始（12/28～1/4）及び保守点検日。
観覧料　一般￥650（￥550）
小学生￥300（￥200）
※（）内は15人以上の団体料金

アクセス
東京メトロ【銀座線】「【千代田線】「【半蔵門線】「表参道」より徒歩8分
都営バス（渋88系統）【新橋駅前行】【渋谷駅前行】『南青山二丁目』下車徒歩2分

ワタリウム美術館

開館時間;
午前11;00～午後7;00
休館日;
毎週月曜日
（不定期で開館）
観覧料;
過去展示会より、
大人【1,000円～1,500円程度】、
学生（25歳以下）、
高校生、
70歳以上の方、
身体障害者手帳、
療育手帳、
精神障害者保健福祉手帳お持ちの方、
および介助者
(1名様まで)
【無料～1,300円 程度】
小・中学生
【無料～500円】
・ペア割あり

アクセス; 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前3-7-6
TEL 03-3402-3001　FAX 03-3405-7714

○地下鉄
・東京メトロ銀座線「外苑前駅」3出口より徒歩7分
・東京メトロ銀座線・半蔵門線・千代田線「表参道駅」A2出口より徒歩9分
・東京メトロ副都心線・千代田線「明治神宮前<原宿>駅」5出口より徒歩13分
・東京メトロ銀座線・半蔵門線、都営大江戸線「青山一丁目駅」1出口より徒歩15分

○JR線
・山手線「原宿駅」竹下口より徒歩14分

○バス
・都営バス「北青山三丁目」より徒歩3分
・渋谷バス千公バス「神宮前三丁目」より徒歩2分

▶駐車場のご用意はありません。お近くの有料駐車場をご利用ください。

外苑前のボーダー柄ビル。

スイスの建築家マリオ・ボッタの設計により1990年9月プライベート美術館として開館した美術館をご紹介します。現代アートを中心に建築・写真・映像メディア・デザインなど独自のコンセプトを持ち、さまざまなジャンルの展覧会を年4回で開催している私設美術館です。

美術館のオーナー兼キュレーターである和多利浩さんは、このワタリウム美術館について、「神殿のようでありながら、温かな家のような居心地の良いみんなの美術館をつくることが目標でした。」と語っています。作品を通して何を感じ取るか、芸術家の考えを受け止め、どのような学びにするのかということをじっくり自分の時間として過ごすことができる美術館です。

過去には、アンディ・ウォーホルやキース・ヘリング、ナムジュン・パイク、ヨーゼフ・ボイスといった現代アートの旗手たちや若い日本のアーティスト達が紹介されてきました。アートは現代を生きるすべての人の日常に、身体に、風景に語り掛け、素晴らしい未来のヒントを与えてくれるものだと和多利浩さんは考えているそうです。

美術館の地下一階にある「ON SUNDAYS」という名のミュージアムショップには、近代美術館を扱った本やマグカップ、Tシャツなどのグッズが売られており、他では見られないデザインが多く揃っているポストカードは特におすすめです。また、2023年7月にオープンした「cafe GATO」では、自家製ケーキやスムージー、コーヒーなども楽しめます。ワタリウム美術館での芸術体験に浸る有意義な時間を、こちらのカフェで過ごしてみてはいかがでしょうか。

根津美術館

開館時間：
午前10時～午後5時
（入館は4時30分まで）
展示室 / ミュージアムショップ /庭園 / NEZUCAFÉ

閉館日：
月曜日・展示替期間・年末年始
ただし月曜日が祝日の場合、翌火曜日

入館料
特別展
オンライン日時指定予約
一般　1500円
学生【高校生以上】　1200円

当日券（窓口販売）
一般　1600円
学生【高校生以上】　1300円
企画展
オンライン日時指定予約
一般　1300円
学生【高校生以上】　1000円
当日券（窓口販売）
一般　1400円
学生【高校生以上】　1100円

＊小・中学生以下は無料。
＊受付にて障害者手帳をご呈示いただきますと、ご本人様と同伴者1名様まで、200円引きでご入館いただけます。

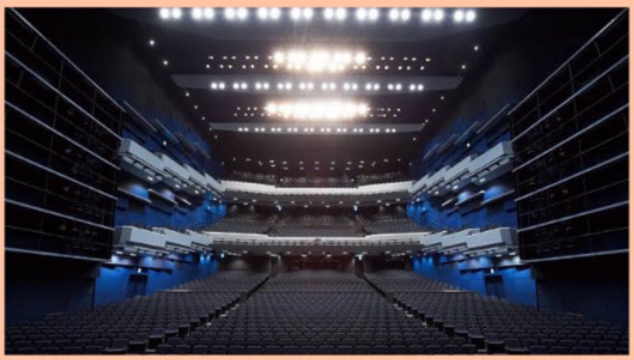
青学から徒歩10分。かつて根津嘉一郎が蒐集したという多種多様の古美術品が収まる根津美術館が現れます。武家屋敷の跡地に建設されたこの美術館は、幾度かの改築を経てもなお和の趣を感じさせる佇まいと美しい庭園を備え、都会のオアシスとも呼ばれるようなどこかホッとできる空間が広がります。

根津美術館のコレクションは、私立美術館でありながらも非常に幅広く、主に日本・東洋の古美術品として書蹟、絵画、彫刻、金工・武具、陶磁、漆工、木竹、染織、考古等多岐に渡ります。国宝7件、重要文化財88件、重要美術品95件を所蔵し、それらは定期的に開催される企画展などにそって展示されます。

興味のある展覧会に足を運ぶもよし、庭園やカフェを楽しみに入館するもよし、空きコマや帰り道の暇つぶしに立ち寄ってみてはいかがでしょうか？
学生生活課には、美術館・博物館等優待チケットがあることも！よりお得にアートスポットを楽しめるかもしれません。

アクセス：地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線〈表参道〉駅下車
A5出口（階段）より徒歩8分
B4出口（階段とエレベータ）より徒歩10分
B3出口（エレベータまたはエスカレータ）より徒歩10分
都バス渋88　渋谷～新橋駅前行〈南青山6丁目〉駅下車　徒歩5分

東急シアターオーブ



青山学院大学から徒歩15分。人々がせわしなく行き交う渋谷駅に隣接する大型複合商業施設、渋谷ヒカリエ。この建物の11階、大都会の喧騒から少し離れたこの空間に、東急シアターオーブは存在します。

東急シアターオーブは東急文化村が運営し、2000人近くのキャパシティを誇る大型のミュージカル専用劇場です。ここでは行われるのは日本国内の公演だけには限りません。ブロードウェイからの来日公演やオペラ歌手のコンサートなど、使用目的は多岐にわたります。そのため、劇場は舞台上の照明や機材の設置の自由度が非常に高いことが特徴です。これがより多様な演出、そしてより自由な観劇体験の提供を可能にしているのです。

また、渋谷ヒカリエという複合商業施設ならではの特色も魅力の一つです。渋谷駅へと続くフロア内に設置され、日常的に立ち寄りやすいチケット売場をはじめ、観劇の前後には商業フロア内でショッピングや食事を楽しむことができるなど、施設全体があなたの観劇体験の一日を彩ります。

本記事を執筆現在、劇場では『天使にラブ・ソングを～シスター・アクト～』が絶賛上演中であり、来年の1月にはミュージカル『オペラ座の怪人』～ケン・ヒル版～が、4月にはマシュー・ボーンの『ロミオ＋ジュリエット』が上演予定です。

演劇を観る人々の心に笑顔と感動を届けるため、東急シアターオーブでは、今日も舞台の幕が上がります。

【営業時間】　（東急シアターオーブチケットカウンター）11:00~18:00

【アクセス】　JR線、京王井の頭線「渋谷駅」と2階連絡通路で直結
東京メトロ銀座線「渋谷駅」と1階で直結
東急東横線・田園都市線・東京メトロ半蔵門線・副都心線「渋谷駅」B5出口と直結
渋谷ヒカリエ11階

私論：AIアートの現在地

―複製技術時代の自己表現―

映画ゼミ　北村祐樹

近年、AIの発展がめざましい。

中でも生成モデルを使用した画像生成技術は、10年ほど前から存在はしていたものの、特にここ2年間でさらなる加速度的な進化を遂げ、いまやクリエイター界を大きく揺るがすほどの存在になっている。

「GPT」と呼ばれる生成モデルをもとに、2021年1月にOpenAIが公開した画像生成AI「DALL·E」。そしてそれに触発され2022年6月に公開された「Craiyon」の大ブームを経て、その後わずか半年も経たないうちにネット上ではAIによる生成画像が溢れかえった。誰でも簡単に、低価格で利用でき、その速度や正確性も一年前とは比べものにならないほどはるかに進化している。

中でも、日本の漫画・アニメ風のイラストにも強いStability AIの「Stable Diffusion」を利用したものを筆頭に、現在ネット上ではAIで出力したイラストなどをそのまま投稿する「AI絵師」と呼ばれる人々が盛んに活動し、賛否両論を巻き起こしている。イラスト投稿サイトPixivでは投稿作品のほとんどをAI製イラストが占めるようになり、その時勢のあまりに急速な変化に、事務局は急遽ガイドライン改訂や棲み分けのためのフィルタリング機能追加などの対応に追われた。

また各国の様々な絵画コンクールや写真コンテストでAI製の作品が入賞するといった出来事が頻発し、大きな騒動となった。2022年9月にはアメリカ・コロラド州のアートコンテストで、2023年4月には世界的に著名な写真コンテスト・SWPAで、それぞれAI生成作品が受賞したことが広く報じられ、物議を醸した。

そうした中で目立ってきたのが、「もうアーティストは必要が無いのではないか」という議論である。AIを使用すれば、これまでよりも圧倒的にハイスピードかつ安価に、精度の高い作品を作り出すことが出来る。これにより、これまでにクリエイター職が担ってきた多くの職はAIに取って代わられることが予想されている。実際、すでに中国ではゲーム業界を中心に多くのイラストレーターがAIに職を奪われ、失業者が急増している。

また、ハリウッドでは脚本家1万人以上によって構成される全米脚本家組合が、ディズニーやNetflixなどの製作会社を代表する全米映画テレビ製作者協会を相手に、脚本制作にAIを使わないよう要求する大規模なストを決行。同時に、「21世紀のラッダイト運動である」とそれらを批判的に見る声も世間では見られた。

本当に、もう人の手による「芸術」は必要とされなくなってしまうのだろうか。

芸術家の仕事は、全てAIによって取って代わられてしまうのだろうか？

AIアートが芸術と呼べるかどうかを述べるためには、まず芸術とは何か、芸術の本質とはどこにあるのかという問いに答えなければいけない。しかしこれは、非常に難しい問題だ。何より、そもそも芸術（Art）という言葉の指す物、そして芸術性という概念自体が、歴史上多様に変遷してきたのだ。

元来Artとは、自然物ではない、人の手が入った人工物のことを指す言葉であり、技術、技法という意味合いが強かった。実際、かつて芸術と技術は未分化の物だった。芸

術とは自己表現のためである以上に、工房の職人達が出資者の依頼に応えて制作する、工芸品のような物でもあったのだ。そして、このように芸術の本質を「うまさ」や「技術」において見てみると、人間は完全にAIに芸術性という点で敗北したと言える。いまやどれだけデッサン力や高い腕前を持つアーティストよりも、AIは正確で、精緻で、鮮やかな作品を、低コストで作る事が出来る。

しかし、時代が変わるにつれ人間の価値観も変化し、芸術性というものの本質もまたその影響を受けてきた。これからの芸術の在り方もまた、時代の精神に合わせて変革していく。特に昨今の急速な複製技術の進歩と世界的な価値観の変動は、これまでの芸術観に大きな変化をもたらすだろう。アートを巡るAI技術の発展も、そうした巨大な流れの中に位置する。ここでは、これからの芸術の在り方を論じ多大な影響を与えた二人の人物を取り上げ、考えてみる。

一人は、二〇世紀前半に活躍したドイツの思想家・文化評論家、ヴァルター・ベンヤミンだ。彼が1936年に著した評論『複製技術時代の芸術』は、カルチュラル・スタディーズやメディア論の領域に現在も大きく影響を与えている。彼が提唱した概念が、「アウラ」だ。ざっくり言えば、ここでは「アウラ」という言葉は芸術作品に宿る神聖な〝オーラ〟のような意味であると考えてほしい。

かつて、芸術作品とは非常に神聖な物だった。世界に一つしか無いような芸術作品を、王様や貴族のような限られた人が所有していた。一般の人にとって芸術作品に触れる機会は限られおり、お城や教会のような場所に実際に赴き、神聖な空間の中で鑑賞するしか無かった時代だった。そうした状況では、芸術作品はかけがえのない唯一の存在であり、さらに人々にとっては「いま、ここ」でしか見ることの出来ないものとなるため、その鑑賞体験には強烈な「唯一性」が宿る。この唯一性がかもし出す神聖さを、ベンヤミンは「アウラ」と名付けたのだ。

しかし、徐々にそうした作品の「アウラ」は失われていく。写本、活版印刷、写真、デジタルメディアと、複製技術は時代を追う毎にどんどんと加速し、現代はまさに複製技術の時代であるとも言えるだろう。絵画は何百何千もの紙に印刷され、ヒット曲は録音技術とネットを通してどこでも聴くことが出来る。社会がそのように進化する中で、ベンヤミンはかつて芸術作品に宿っていた「唯一性」が失われたという。世の中にモナリザの写真が何枚も複製され、ネット検索をすればいつでもどこでもモナリザを見ることが出来る。そんな状態でルーブル美術館の本物のモナリザを見ても、果たして以前ほどの感動があるだろうか。ベンヤミンは、複製技術の浸透によって鑑賞体験から「唯一性」が無くなっていくこうした状況を、「アウラの喪失」として提唱したのだ。

それでは、現代とは「アウラ」無き、芸術の死んだ時代なのだろうか？否、芸術とは時代によって形を変える物であり、現代にもまた新たな「アウラ」が見いだされるようになっている。ベンヤミン自身も、複製技術時代であるからこそ生み出される新たな「アウラ」の在り方を、期待を持って予感していた。それは、「組み合わせ」や「改良」といった行為だ。

例えば、新興芸術としての映画を考えてみよう。映画は、当然俳優の演技などを撮影したフィルムという「複製品」によって構成されている。しかし、それを編集し、切り貼りすることで、そこに新たな新鮮さをもたらすことが出来る。これをベンヤミンは「遊戯性」と呼び、これからの「アウラ」はこうした行為を通して見いだされていくとした。

他の例を挙げるとすれば、現代アートだ。現代アートの先駆者であるマルセル・デュシャンは、代表作「泉」でトイレの便器をそのまま作品として出品した。複製品であるトイレの便器自体に「唯一性」はないが、ここではそのトイレを出品するという「行為」自体には唯一性が宿っている。

より身近な例で言えば、現代のリミックス文化が挙げられるだろう。例えばヒップホップでは、DJが様々なジャンルから自分なりのセンスで音楽を選び抜き、それらを組

み合わせる（ミックスする）ことが自己表現になる。またYouTube やニコニコ動画では、しばしば動画投稿者が様々な動画素材・音声素材を組み合わせて、新しい動画作品を作っている。そしてさらにそれらの作品もまたリミックスされる対象となり、三次創作、四次創作と、何度も何度も組み替えられ、ミームとして拡散されていく。どれも、素材自体はありふれた複製品でありながら、それを編集や組み合わせと言った「行為」によって「唯一性」が生み出されている。

その人にしか出来ない行為、いまここでしか出来ない行為。作品自体が、ありふれた複製品によって構成されていたとしても、それをめぐる「行為」自体に、唯一無二の「その人らしさ」や「一度限りの神聖さ」は宿る。それこそが、現代の芸術が注目している「アウラ」だ。

そしてそれは、さらに元を探ってみれば、「全ての時、全ての場所、全ての人は、みな唯一無二である」という事実にたどり着くだろう。唯一性とは、時代や場所、そして「私らしさ」という個性や志向性から刻々と湧き出て、どうしようもなく作品に宿ってしまうものなのだ。

こうした時代の流れを踏まえ、「芸術の民主化」という観点から新しい芸術の在り方を論じたのが、岡本太郎だ。彼は著書『今日の芸術』において、これからは全ての人が「自己表現」の術として絵を描くべきであると述べた。うまい、綺麗な絵ではなく、自分という存在やその在り方を巡って自分と格闘して生み出されるような芸術こそが、美しいというのだ。正解の線というのは、どこにも無い。他者の価値観や判断基準に頼ること無く、「自分だけの線」を見つけていく作業こそが、今日の芸術となる。その時、そこに技術的な巧拙は関係なくなっていく。誰もが絵のうまさなどと関係なく、心と心の対話を通して、自分らしさを見つけていく。そうして、全ての人々が対等な自己表現者となっていくのだ。

彼のこうした提言には、ある意味で実際に今の社会と通じる物がある。現代は誰もが表現者になれる時代だ。インターネットの発達により、SNS や投稿サイトを通じて誰でも自由に発言・発表ができるだけでなく、音楽制作ソフトや映像制作ソフト、利便性の高い描画ツールなども充実しており、そこに技術的なハンディキャップは無くなりつつある。

このまま、これからの「芸術」は、変わっていくだろう。単なる「うまい作品」「技術力」は意味をなさなくなり、技術的な巧拙、上下関係は無くなっていく。かわりに、「自己表現」性がより価値を持ち始め、その人の、その人らしさこそが何よりも尊ばれるようになる。人の個性に優劣が無いように、誰もが皆「心」を持った存在として、対等な関係になる。そんな多様性の未来を、私たちは迎えつつあるのかもしれない。

さて、ずいぶんと遠回りになってしまったが、現代の芸術性の在り方を巡る重要な議論について、考察を深めることが出来た。

芸術性とは、「今ここにしか生まれ得ない」とか、「私にしか作り得ない」とかいった「唯一性」に宿る。そしてそれは、例え複製技術に支配された現代という時代においても失われない。「今という時間、ここという場所、そして私という人間が、かけがえのない存在である」という絶対的な唯一性がこの世にはあるからだ。

例え複製品が素材であったとしても、その編集や組み合わせという「行為」自体に、その時代や地域性、作者の個性のかけがえのなさは表れうる。今日の芸術は、その表面的なうまさや技術力よりも、そうした「その人自身」に向き合った自己表現としての在り方を尊重してきた。

こうした価値観が、現代を生きる私たちの芸術観の根底に通じていると言えるだろう。

それを踏まえて、改めてAIアートについて考えてみる。本当に、AI によって人間が芸術をする意味は、無くなってしまうだろうか？本当に「もうアーティストは必要が無い」と言えるだろうか？私は、自信を持って、そんな時代がやって来ることは無いと断言できる。

AIにどんな情報を学習させるか、どんなプロンプトを入力するか、生成画像の中からどれを選ぶか。その一つ一つに、作り手の個性や心は宿りうる。

芸術という行為は、あくまで人と人との心を共鳴させ合う事自体を指すであって、作品はその間をつなぐ媒介物でしか無い。それならばAIもまた、そのための「道具」にしか過ぎないだろう。いつだって、本体は人間側にあるのだ。

むしろこの「自己表現」の時代に、AIの画像生成技術は大きな意義を持つだろう。

AI技術を利用すれば、様々な事情から美術教育を受けられない人や、障害を抱え自由に作品制作が出来ない人なども含め、あらゆる人から「うまさ」や「デッサン力」といった技術力の壁をなくすことが出来る。誰もが技術上の制約を受けず自分の思うように「自己表現」でき、あらゆる可能性を追求することが出来る時代。そんな未来を、AIは実現してくれるかもしれない。

2023年3月、映画監督の樋口慎二らを審査員に迎え、第一回AIアートグランプリが日本で開催された。大きな話題を呼んだ本イベントでグランプリを勝ち取ったのは、亡き妻の歌声や姿を、残された録音や写真を元に夫がAIによって甦らせて作ったというミュージッククリップだった。AI美空ひばりなどへの批判も記憶に新しい中、それでも亡き妻との思い出をたどりながら、妻に永遠の愛を捧げたいと何度も何度も試行錯誤を重ねプロンプトを実行する制作者の姿には、底知れぬ深い思いと、人間の「心」の絶対的な勝利を感じさせられる。かつて夫婦の間にあった愛、夫婦で歌って過ごした時間。そうしたもののかけがえのなさが、プロンプトの入力や学習データの蓄積、そして出来上がってくる作品の選択といった行為自体に宿っている。複製品だけで構成された作品に、唯一性が宿る瞬間である。

人は結局、上手い絵よりも、よくできた音楽よりも、そこに宿る人の「心」の唯一性自体に感動する。今、この場所にしかあり得ない唯一の存在であるからこそ、全ての人は価値があり、個性的で、きらめいている。その証明こそが芸術という行為であり、その心はAIをすらもただの「道具」に変えてしまう。

どれだけ技術が発達しようと、今という時間、ここという場所にある、私という存在は、どんなAIにも再現することが出来ない。そこにある「唯一性」だけは、どれだけ複製技術が発展しようと、失われることはないのだ。

【作品紹介】AIと創作行為を考えるための三作

●Mario Klingemann：《Memories of Passersby I》

ドイツ人アーティストによるインスタレーション。中央のAI装置がその空間にいた人々の顔を記録し、それらの情報を元にした架空の肖像画をリアルタイムで常時生成し続ける。その空間がたどってきた「思い出」が混淆し、生成変化を続ける一つの走馬灯になる。一瞬として同じ画は生まれ得ず、それらは二度と再生もされない。

●やながみゆき：シリーズ「私たちはミザリー〈生き続けるシンフォニー」

ヒップホップやEDMを横断し、現実感の消失したAI時代における〝心〟の拠り所を追い続ける音楽家・やながみゆきによるボカロ楽曲群。不完全なAIが生成する悪夢のような風景と、個性を奪われた機械的な合成音声たちの合唱に、それでも唯一性の温もりを見いだそうともがく。生命と非生命のアイデンティティを巡る不安と希望に胸が締め付けられる。

●機能美p：「そんな話を鴉は喰った。」

第一回AIアートグランプリにて審査員特別賞を受賞した映像作品。AIアートの現代性をネット文化への愛情たっぷりにSFエンターテイメントとして昇華する、新進気鋭の映像作家によるキネティック・タイポグラフィ。生成AIと人類の「物語る」行為を巡る生存競争を描いた、重厚でユーモラスなSF奇譚。私たちはなぜ創作し続ける生き物なのか、その本質を問いかけるデジタル時代のおとぎ話。

インスタグラムで比芸生に聞いてみた！

比芸の人って普段何を考えているんだろう？ひげ会報公式インスタグラムのアンケート機能を使って、比芸の学生にいろいろなことを聞いてみました！比芸生の生態を暴いていきます！

Q1 あなたに最も影響を与えた作品は？

- 『映画ドラえもん　新・のび太と鉄人兵団～はばたけ 天使たち～』
- 映画『レオン』
- 歌舞伎『女殺油地獄』
- 『ジョジョの奇妙な冒険』
- 『グランド・ブダペスト・ホテル』
- 『アラバマ物語』
- 『のだめカンタービレ』
- 太陽の塔
- 肖像画『パンジーの婦人』
- ジェラールプレスギュルヴィックの『ロミオ&ジュリエット』
- 『薔薇の騎士』
- ティム・バートンの『ナイトメア・ビフォア・クリスマス』
- 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』
- 『時効警察』
- 『君の名前で僕を呼んで』

今回のテーマでもある、原点となる作品を聞いてみました。歌舞伎から映画までさまざまですね！Q2は比芸あるあるらしい？授業の中でいろいろな芸術に触れられるのも良いですよね！

Q2 入学当初から今までで興味のある分野は変わった？

- もともと西洋演劇(ミュージカル)に興味があったけど、今は専ら日本古典芸能に没頭してます。
- 演劇や音楽に興味が出た
- 変わらなかったけど他も素敵だなと思った！

Q3 あなたの推しは？

・ジェシー(SixTONES)
・礼瀬マヨイ(『あんさんぶるスターズ!!』)
・女性アイドルです♡
・映画『アラバス物語』のアティカス・フィンチ、グレゴリー・ペックは良いぞ

比芸なんてみんなオタクやからね(偏見)

Q4 みなさんが目指すものは？

見て、なんて素敵な回答たち！

・音楽発掘のA&R目指してます！
・死ぬまでに演出家になるか、劇団を作りたいと思っています！
・教育に関わる仕事に就きたい

比芸のみなさん、たくさんの回答ありがとうございました！
ひげ会報公式インスタグラムをぜひチェックしてみてください♡

@HIGE_MAGAZINE

Q4 初心者の人もこれだけは抑えて！自分の研究分野でおすすめの作品は？

・東京国立博物館は学生(無料)のうちにいっぱい行くべき。
・『連獅子』踊りだし毛振りは派手だし、初めての人にはわかりやすい！
・小説及び2013年の映画『華麗なるギャッツビー』

ぜひ、きっかけの作品としてチェックしてみてください！

Q5 比芸の好きなところ・入ってよかったところは？

・お互いの趣味を否定しない所
・芸術という共通言語があること、その居心地の良さ！
・色んな芸術に興味のある子達と交流できること！
・みんなのファッションが個性的！
・人数が多すぎないので仲が良い

私も、初めて趣味を共有できるお友達に出会いました〜(涙)

山本タカトさんインタビュー

私の原点

浮世絵×耽美 創作の原点を探るインタビュー

聞き手：吉本

山本タカトさんプロフィール

1960年、秋田県出身。東京造形大学絵画科卒業。「浮世絵ポップ様式」「平成耽美主義」という独自のスタイルを打ち出し、幻想的な画風で知られる。画集『緋色のマニエラ』『ナルシスの祭壇』『ファルマコンの蠱惑』『殉教者のためのディヴェルティメント』『ヘルマフロディトゥスの肋骨』（editions treville刊）、エッセイ画集『幻色のぞき窓』『山羊のいる庭で』（芸術新聞社）刊行。国際浮世絵学会会員。

幼少期ーグラフィックから美術へ

吉「今回のインタビューは、テーマを『私の原点』と設定させていただきました。山本さんの原点について、色々とうかがえたらと思います。よろしくお願いいたします」

山「よろしくおねがいします」

吉「まず幼少期からお話を伺いたいのですが……著書を拝見しまして、幼少期には伊藤彦造さん、萩尾望都さんの影響を受けられ、またその後ダヴィンチやゴッホに関心を抱いたとの事でした。そうした作品たちの影響を受けられた中で、どの段階でご自身が創作する意欲がわいたのか、また興味の変化のきっかけなどはありましたか？」

山「そうですね。最初はやはり、いきなり物を見て絵を描いて……というのではなくて、漫画が好きだったので漫画のキャラクターを真似して描いていました。

そうしているうちに、だんだんと自分でストーリーも作ってコマ割りのある漫画を作ってみたい、と思うようになって。で、当時家には少年少女向けの文学全集があって、その中で好きな物語を選んで漫画にしてみようかななんて思うように。中でも好きだったのが『義経記』、源義経の話ですね。それを全集の中でピックアップして。たまたまその全集に挿絵がついていて、それが伊藤彦造だったんですよ。その伊藤彦造の絵に憧れて、何度も真似して……まあ見るとやっぱり真似して描きたくなりますから。それで漫画のキャラクターみたいなものを作って、コマ割りして大学ノート4冊分位描いたと思いますね。それは今はどこに行ったか見当たらなくなってしまったんですけど（笑）それが自分で創作を意識したもののはじめですね。」

山「その後、漫画を描いていたんですけど、中学校1年か2年ごろにピカソが亡くなり、そのニュースを見て衝撃を受けまして、美術というものの存在を知りました。で美術部みたいなものを作ったりして。当時中学校にたまたま美術部がなかったもので、そこで美術のことを少しずつ学んでいったんですね。その中で、最初はゴッホだったり、レオナルドダヴィンチだったり、その辺を見ては、ちょっとこういう風に描いてみたいな、と思って真似したりしていましたね。そのうちだんだんと、シュールレアリスムというものに出会って……マックスエルンストとか、サルバドールダリとかそういうのにまた憧れて、真似して描いてみたり。まだその頃は油絵らしいものは描いていなくて。高校に入ってからですね、油絵を中心に描いたのは。高校でも美術部で、シュールレアリスムから始まったんですが、19世紀末の美術というのに出会い、今度は世紀末美術の代表的なグスタフクリムトやギュスターブモローとか、そういうものを見てはまた真似したり。だいぶその頃には漫画からは離れていたんですけども、萩尾望都さんの『ポーの一族』を友達から紹介してもらって、中学生の頃に日光アレルギーを発症していたこともあり、それに非常に関心がありました。それは、自分を照らし合わせて読んだのもそうですし、とにかく物語の構成も素晴らしくて。まあ、美術と同時に、グラフィックなものに対しても興味は続いた感じですね。」

吉「ご自分で美術部を立ち上げられたんですね。それは美術を学ぶために学校の先生に教わってという感じで……」

山「そうですね。僕は美術部に入る前は剣道部だったんですね。剣道部の顧問が美術の先生だったもので、たまたまそういう縁もあって、じゃあ美術部を作りましょうかと先生と相談して作ったんですね。」

吉「そうだったんですね」

山「ええ。それから高校に入って美大を受験するイメージも出てきたので、油絵とかデッサンとか、そういうのも勉強していましたね。」

大学時代ー

吉「では次に、大学時代についてお聞きします。ご自身で振り返って、どんな大学生だったと思われますか？」

山「僕は大学はね、あんまり行ってない……行ってないというか、講義には出ていたんですけど、実技にはあんまり行かなくて。当時また新たな美術に関心を持ち始めて。1年浪人したんですけども、当時、池袋にあった西武美術館で「ジャスパージョーンズ展」というのがやっていたんです。アメリカのモダンアートなんですけど、それをきっかけにアメリカのモダンアートに関心を持ちまして。そういうのもあって、大学の1年か2年の頃の基本的な油絵だとかデッサンの授業は、あまり出たくないというのがあって（笑）で、勝手に学校に行かないで、家で自分なりにそういう美術を研究して作ってたんですね。3年4年になると、コースに分かれるので、そこでモダンアートを専攻してやるようになるんですけど。やっぱりそれと同時に、イラストレーションとかそういうグラフィックなものも続けていました。」

吉「ありがとうございます。アメリカのモダンアート……現在描かれている作品は、日本の浮世絵をもとにされているかと思いますが、浮世絵を意識されたのは大学の頃ではないですか？」

山「大学の頃よりもっと早いんですね」

吉「あ、そうなんですか？」

山「実はその、世紀末美術というのに関心を持ったときに、色々勉強していると、当時の19世紀末のヨーロッパではジャポニスムというのが流行っていて。そこで、日本の浮世絵が紹介されてて、そこから逆輸入的に浮世絵に出会った感じです。僕の体質が、あまり遠近法だとか一点透視図法だとか、モデリングで形を影で描くようなものよりも、線と色面で平面的に描くことに、魅力を感じていたんです。ですから、これは自分の絵を作っていく上で非常に役立つな、というのもあって浮世絵に強く関心を持つようになりました。」

吉「というと、高校のときの19世紀末美術に関心を持たれた時期と同時期に、ジャポニスムから、という」

山「そうですね。見ると、やっぱりこれを自分の作品にどうにか取り入れたいなと思うので、そういう付け加えたり、はずしたり、を何度か繰り返すうちに自分のスタイルができてくるような感じでしたね」

吉「なるほど。大学時代のお話をもう少し。大学生というのは、個人的に比較的時間のある時期かと思っていて、美術はもちろんですが、それ以外の芸術にハマるというか、興味を抱かれることはありましたか？」

山「僕はほとんど美術一筋だったんですけども（笑）あとは、本を読むぐらい。吸血鬼文学だとか、そういうのは好きで読んでましたけれど。基本的にゴシック

系の文学が好きだったり。それは絵のテーマにもなりましたし、それこそ19世紀末の美術もかなり文学的な要素が強いですから、そういうのは勉強になりましたね」

浮世絵ポップ様式から平成耽美主義へ

吉「大学を卒業されて、10年後「浮世絵ポップ様式」を打ち出し、その後「平成耽美主義」を打ち出したと、ご経歴で拝見しました。この名称の変化は、どのような経緯からうまれたと考えになられますか？」

山「大学を出て最初にモダンアートをやりたいなと思っていたんですけれども、まあ簡単にモダンアートだけで生活できるような状況ではなかったので、同時にイラストレーションの仕事を始めて。イラストレーションの仕事をする上で、そのスタイルに浮世絵を取り入れたり、今までやってきたビアズリー等世紀末の美術を取り入れたりしていたんですね。そうやっているうちに、生活のためといってはあれですけど（笑）イラストレーションの方が忙しくなって、だんだんモダンアートの方はできなくなったんですけど。ただ、当時はバブル期だったのでイラストレーションの仕事は忙しくて、それがだんだんメインになっていったんです。その後バブルが崩壊すると、今度は中心にやっていた広告の仕事がなくなって、挿絵の仕事が中心になっていきます。そこでまたかつて見た、伊藤彦造だの漫画だの浮世絵だのそういう絵のスタイルが、そこで使えるようになって。そこに自分である程度ポップな要素を入れたりして、自分の様式を作る上で、浮世絵ポップ様式と勝手に名称を付けたんです。」

山「それでそうですね……90年代後半になると、幻想耽美なものに興味が移っていく中で、もう少しポップではなくて、耽美な作風にしていく上で平成耽美主義という……また勝手な名称をつけて（笑）もしかしたら誰かに言われたのかもしれませんけど、そういう名称になっていたんですね。」

泉鏡花『天守物語』

吉「山本さんは、『天守物語』以前から泉鏡花の作を題材とした作品を発表されていましたが、あらためて『天守物語』の制作をしよう、という段階になってどのようなお気持ちで臨まれましたか？」

山「最初はね、『マリアの心臓』という渋谷の公園通りにあった人形館からの依頼で、『夜叉が池』を描いたんですね。そこで泉鏡花の展覧会をやりたいっていうんで。その『夜叉が池』の、お雪さんでしたっけ？　そういったキャラクターを挿絵的ではなくて、イコン的というか、

TAKATOY999

↑山本さんの作品は
こちらのInstagramから！

祈祷画のようなイメージで描いたんです。それをみた泉鏡花記念館の学芸員が、たしか生誕140周年記念かなにかで絵を依頼してきたんです。最初の『夜叉が池』の絵は売れて手元になかったので新たに書き下ろしたんです。そうですね、『夜叉が池』が、泉鏡花の最初の作品となりました。その後、『草迷宮』執筆から百年だったかの記念で、また依頼があって『草迷宮』の挿絵本を作るということになったんです。最初どの作品でいくかっていうので聞かれたんですけど、僕はたぶん最初に出会った泉鏡花の作品っていうのが多分『草迷宮』だったと思うんです。いきなり『草迷宮』を読み始めたわけではなくて、澁澤龍彦のエッセイ集に『思考の紋章学』というのがあって、その中の『ランプの廻転』というエッセイで『草迷宮』の内容が語られていて、これはぜひ読んでみたい！　と。読んだら結構面白くて、難解といえば難解なんですけど、ただそれはかつて読んだ『ポーの一族』のようなイメージが僕の中では重なってて。こう時間軸が錯綜したり、前後したりしますよね。そういうちょっと分かりにくい構成だけど、入れ子状態になったような構成が非常に魅力的で、大好きになって、ぜひとも『草迷宮』で最初に挿絵本を作りたいと。その後ですね、『天守物語』は。天守物語はあれはどういう経緯があったんだか……」

山「ああ、145年の記念で依頼があったんですね。それで巨匠の宇野亜喜良先生と一緒に描くことになって、それはそれで非常になんというか……他にはないものができたと思いますけど。」

吉「物語のテーマがある中で制作されたと思うのですが、どういった部分に注力しましたか？　イメージ構想であったり、この作業に！とか」

山「『天守物語』は、鏡花の中では比較的分かりやすい文章だと思ったんですね。描写に忠実というか、読み込んで状況をイメージして……それで、多少説明的になった感はありますけど、『天守物語』の決定版になるくらいの感覚で描きました。まあ宇野さんがかなり自由に描かれてたので、僕の方はわりと原作に忠実にやりたいな、と思ったんです。」

吉「原作に忠実に……『天守物語』は他の媒体で舞台化だったり色々なジャンルでされていると思いますが、参考になさることはありましたか？」

山「それはあの、玉三郎さんの『天守物語』はとても参考になりましたけど、あまり見すぎるとあの……（笑）影響されすぎるので。それでもかなり影響されたと思いますけど。まあそれも、決定版と言えば決定版なので。あれから逃れることはできないというのはあるかな、とおもいますね。」

吉「そのお話をうかがって気になったのですが、私は山本さんの描かれる人物はこの世のものではないと思うほどに美しいと感じていて。玉三郎さんもそうですが、普段はモデルにされる方がどなたかいらっしゃる訳ではないのですか？本当にイメージの中で」

山「それはよく聞かれるんですけど、具体的なイメージの人物はいなくて。多分

ずっと子どもの頃から描いてた顔があって、それがどんどん強化されていった結果できた人物の顔だと思うんですよね。まあどうしても絵描きは描くものが自分に似るというのもありますけど、それは母親に似てたり妹に似てたり、そういうことは言われることはありますね。でも具体的に意識してやっていた訳ではないです。あとは好きだった伊藤彦造だとか、の影響も多少入っているかも知れませんね。」

創作の原点

吉「ご自身を振り返ってみて、創作の意欲をかきたてられるもの、という意味での原点はなんだと思いますか?」

山「さっきから言っていますけども、なにかとどう出会って、自分の作品にどう取り入れていくかっていうので。大体テーマと言ってもすごくシンプルで、ちょうど絵を描き始めた頃ー思春期の頃の感覚と言いますか、感触といいますか。ちょうど、死や性を意識し始める時期ですよね。それまではそんなこと考えもしなかったのが、そういうものに対する不安とか期待とか。それが多分、自分の根本的なテーマだと思うんですけど、自分の存在とはなにか、とか……そういうことだと思うんですよね」

吉「ここまで、山本さんの関心を抱いた方々についてもうかがってきましたが、改めてそうした人々が描こうとしたテーマと、ご自身の描くものの共通点として感じるものはありますか?」

山「それは多分そのまま重なっていると思うんですね。自分の好きなものを見ると、やってみたい、自分の作品に取り込みたいと思うので。それが全部反映されて、自分の作品なりテーマなり世界なりができていると思うんですよね。だから、なにと出会ってなにを取り入れて、あるいはなにを外して、というのはありますけど」

吉「最後に。美術を含む複数の芸術を学んでいる学生、また学んでいこうとしている受験生たちに向けて、お言葉を頂戴できますか?」

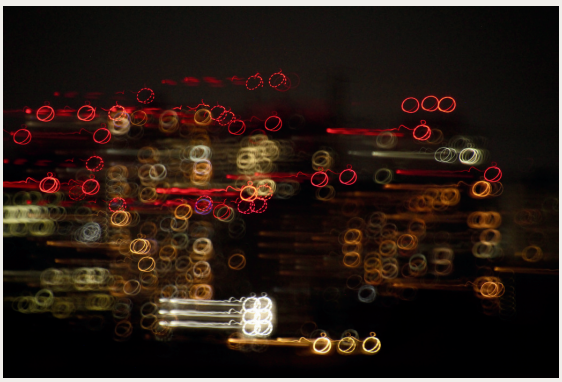
山「やっぱり、出会いを大事にして。何と出会って、どう変化していくか分からないので、気になったものは、実際に自分でもやってみたり考えてみたり描いてみたり、それで違いも分かってくるし共通項も分かってくるから、色々ととりあえず試してみることが大事だと思います。出会いに敏感であることだと思います。」

ひげ生オリジナル作品展示室

ひげぎゃらりぃ

2年　藤原大地
(instagram : @hiyazyake)

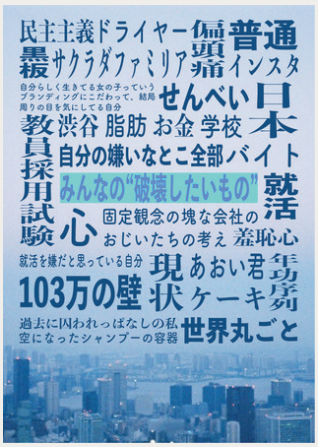
ステッカーを作ってます！



『Tron』

3年 西田（ instagram : @ssoo04290126)

シャッタースピードを長めにして、シャッターが開いてる間にカメラを軽く一周まわしたら街の光がいい感じに円を描いた。題名は、光の線を引いている円がいくつかあり、映画『Tron Legacy(2010)』を彷彿させたことから取った。



『VOICE OF YOUTH』

3年 浅賀 優希（ instagram : @yuki_asaga ）

昔から雑誌も好きだったし、何かをつくることも大好きでした。
大学2年の時に取っていた「出版ジャーナリズム」の授業もきっかけとなって、完全自主制作の雑誌を刊行。やっぱりものづくりは楽しいけど、とってもエネルギーを使うことでもありました。意気込んで1冊作ってみたけど、実はまだ2冊目はできていないんです。

でも、ひげ会報委員の友達が「載せない？」って言ってくれて
（彼女は素材が集まらないからって焦ってたけど笑）
また作りたい、作らないとと思いました。
少しでも興味を持ってくれた方は是非@yuki_asagaをフォローして、
ゆっっっくり待っていただけたら幸いです。

創刊号の表紙を飾ってくれた日和も、
制作を手伝ってくれたさくらちゃんも比芸で出会った友達です。
他にも比芸には私なんか足元にも及ばないくらいすごいものづくりをしている友達とかアーティストとして活動している友達がもはや当たり前のように周りにいて、ありきたりな言葉だけどとても刺激的な毎日。
VOICE OF YOUTHは比芸に感化されて作った雑誌でもあるので、
ひげ会報で紹介してもらうことができて嬉しいです。

ひげぎゃらりい

『permanent』

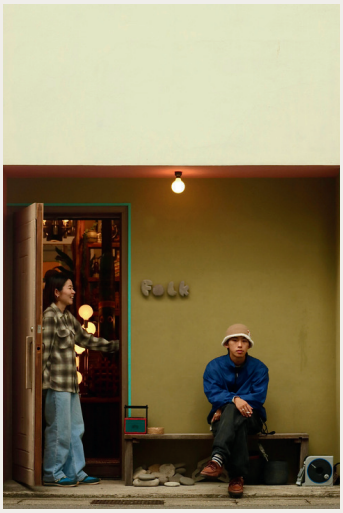
２年 赤津 純菜

2023年青山祭美術部展示をした油彩画です

〈Gifted〉

4年 柊（ instagram : @h0lly.cam ）

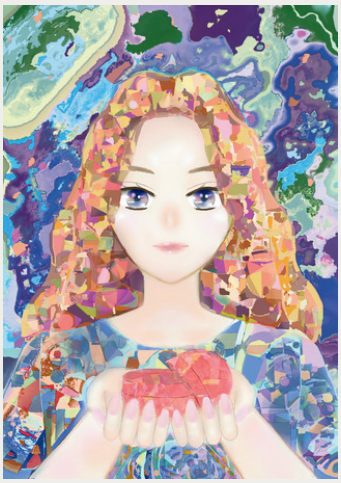
岐阜県のアンティークショップ「FOLK」。
この街の人には、訪れた誰しもを街に馴染ませてしまう才能がある。
彼らの笑顔と温もりを土産に私は帰路についた。



『ガチャガチャと私』

3年 Saori

ガチャガチャを初めとしたミニチュアなもの達の無限の可能性を宇宙っぽさで表現しました。
というのは後付けで、何気なくお絵描きをしていた時に特殊な技法を発見したので、それを最大限に使って描いてみました。



ちっちゃいもの倶楽部

(instagram/X : @agu_miniature)

ちっちゃいもの倶楽部というサークルを設立し、
ミニチュアサイズのものを愛でる活動をしています。
ちっちゃいものについて語り合ったり、ちっちゃいものに関連したスポットにみんなで遊びに行ったりするサークルです。参加希望は各種SNSのDMまで！

リサイクルショップで買ったシルバニアファミリーのおうちを
自分で塗装し直してオリジナルハウスを作りました

Editor's Note

ひげ会報2023編集委員会 委員長
比較芸術学科3年

木村美陽

比較芸術学科の会報ですから、読者の方に楽しんでもらうには、制作者の興味が向いていて、楽しく執筆することが一番の近道だと考えていました。そのため、企画会議で出た案はほとんど全て採用して組み込んでいます。今年度のテーマが原点回帰ということで、それぞれの芸術の基本に立ち返りつつ、最新の芸術の動向について考えを巡らせる機会となるような会報になっていたら幸いです。

ひげ会報2023編集委員会 副委員長
比較芸術学科3年

宇津城 風夏

好きなものを思いっきり「好き」と言える場所。私にとって比芸はそんな素晴らしい環境でした。先生方も学生たちもみんな芸術を愛していて、新たな思考と刺激を与えてくれます。日々、真剣に誠実に芸術と向き合えるのです。そして、芸術を通して自分自身を見つけることもできる場所だと思っています。本誌を通して、そんな私の愛する比芸の魅力が皆様にも伝わっていればうれしいです！

今回のテーマは「原点回帰」としました。

コロナ禍で多くの芸術活動が制限されたり、移動することそのものすら自由でなくなりました。美術館へ鑑賞に行くことも、劇場で芝居や歌舞伎を観ることも、コンサートで生の音を聴くこともできませんでした。芸術は不要のものだと呼ばれたことさえありましたね。しかし、そのような環境に置かれたからこそ見出された芸術の価値、見つめ直す時間があったからこそ気づけたその魅力が多くあります。抑圧されていた生活から、徐々に制限が緩められている現在。感染対策は継続しつつも、足を外に向けて生の芸術に触れる機会を積極的に増やすことができます。また、変化の著しい現代における最新のアートも、水脈を辿れば私達が学ぶ芸術から生まれたものです。私達は今一度、芸術の美しさに純粋に惹かれた原点に立ち返り、その輝きを見つめ直したいと考えました。

ひげ会報編集委員

【会報責任者】　比較芸術学科教授 三浦哲哉

【編集長】　木村美陽

【副編集長】　宇津城風夏

【執筆・校正】
小田部真於｜菊地恵｜椎名珊瑚｜北村祐樹
齋藤瑠夏｜孫釉棚｜濱登日花里｜山中彩穂吏｜吉本早織

【デザイン】
東出梨乃｜戸澤萌里｜森本雪絵｜谷田貝昴生

【取材協力】
――外部――
〈画家〉
山本タカトさん

――比較芸術学科――
〈教員〉
出光佐千子｜井上由里子｜佐藤かつら｜津田徹英｜那須輝彦
広瀬大介｜三浦哲哉｜水野千依

〈学生〉
一條日和｜上杉七海｜内海帆乃夏｜岡田ののか｜税所航紀
中尾悠真｜樋口茉莉｜眞仁田莉子｜南直冴｜吉本伊吹　　他

問い合わせは
比較芸術学科研究室（03-3409-9764）まで

比較芸術学科会報　二〇二四年三月発行　執筆／青山学院大学比較芸術学会委員
発行／青山学院大学比較芸術学会　編集人／木村美陽　宇津城風夏